

鹿児島における若年層の生活文化調査（第2報） 大学生の生活状況と文化に関する意識と実態調査

Investigation of the Life and Culture of Youth in Kagoshima (2)

—Investigation of Actuality and Consciousness on Living of University Students—

西迫貴美代・坂上ちえ子

NISHIZAKO Kimiyo・SAKAGAMI Chieko

Abstract

The purpose of this paper is to investigate actuality and consciousness on living of university students. In this investigation a questionnaire survey was conducted on 369 youth students of university and college in Kagoshima. The results are briefly summarized as follows; 1) Living : Most of university students in Kagoshima were satisfied with their living environment. And they wish to make a living on their daily life through friendly exchange between their friends and themselves. 2) Body : There was a discrepancy between the real body of university students and their body image including of body proportion. Especially as often pointed out, female students whose body consciousness is higher wanted to reduce their flesh in spite of their proper weight. 3) Culture : They spend enough time for watching TV and reading comics and fashion magazines. Their cultural activities were closely related to necessity cost for spending leisure time. 4) Consumption : It became clear that there was steadiness of propensity to both consumption and saving in the survey subjects who were youth university students. 5) Consciousness : The subjects in this survey had high standard consciousness of behavior that was influenced by social norm and socially accepted idea.

1. はじめに

若年層の生活文化に関する調査プロジェクトを立ち上げた1999年は、少年による凶悪犯罪が多発し、10代の若者に対するネガティブなイメージばかりが喧伝されていた。そのような情勢の中、1999年から2001年の3年間にわたり中学生を中心とした若年層を取り巻く諸問題について調査と研究を重ね、若年層に関する調査成果を蓄積することができたと考える。それらの成果と1999年に行ったプレ調査結果¹⁾を踏まえて、今回は大学生を対象として生活についての実態と意識に関する調査を行うこととした。調査者はいずれも短期大学に勤務し、身近に若年層の女子大学生と接している。にも関わらず、彼らの生活

に関する実態や意識についての詳細な情報を持ち合わせていない。そこで今回は、1999年から2001年にかけて行ったプロジェクトの目的を引き継ぎながら、対象者は大学生に限定し、消費を含めた生活状況と身体、文化に関する実態と意識について質問紙による調査を行った。そして、調査結果についてはまず単純集計を行い、勤務先の短大生と男子学生が多く通う国立大学の理系学部生との比較を通して、その特性の把握を試みた。

2. 研究方法

(1) 調査方法

調査方法には、1999年に行ったプレ調査と同じ留置き法自記式による質問紙調査を用いた。調査は、2003年11月から12月にかけて行った。

(2) 調査対象と分析方法

今回の調査対象は、大学生に限定した。鹿児島にある国立大学の理系の学部と、1999年に行ったプレ調査と同じく調査者が勤務する公立短大を比較対照校として選定した。また、多くが未成年であることを想定して、いずれの大学も1年生を対象とした。(以下、鹿児島にある国立大学の理系学部に在籍する調査対象の学生を「国立大(理系)」、調査者が勤務する公立短大での調査対象学生を「公立短大」、さらに、全対象者を「全体」と略して記す)調査票は国立大(理系)で274票、公立短大で208票を配布した。回収率は国立大(理系)が83.6%、公立短大が67.3%で、2校とも有効回答率は100%であった。

今回の報告では単純集計のみを行い、その結果は調査者全体、国立大(理系)、公立短大で比較しながら分析することとした。

(3) 調査項目

調査項目は、まず、調査者の基本属性知るために、所属学部、性別、対象者の年齢、出身地、居住方法、1ヶ月に親からもらう小遣い額、1ヶ月のアルバイト額、父親の年齢、母親の年齢をフェイスシートの項目として選定した。調査内容については、調査の目的が大学生の生活全般に関わる実態と意識の把握であるため多岐にわたった。調査内容は、生活、身体、文化、消費、意識に分類し、さらに詳細な質問項目でそれぞれを構成した。生活に対する質問では、生活時間、生活に対する満足感、学業の目的、大学生活に対する満足感、アルバイト、友人関係、生活の不安、親子関係、食生活を項目とした。身体に関する質問項目では、健康、身体感覚、心身の状態を尋ねた。文化については、余暇、雑誌と新聞の購読、スポーツ観戦、嗜好品の利用状況、消費については、月平均の支出額、所有物、購入の判断基準、臨時収入の使い方、貯蓄の実態、金銭感覚を質問項目とした。意識を問う部分では、価値、将来の見通し、人生目標、自己評価、自己像とその根拠、労働観と就職観、規範意識、生活志向、日本に対する認識、生きがい、地域への愛着、余暇観、社会観、結婚観、配偶者に対する考え方を項目に挙げた。質問項目は、1999年に行ったプレ調査と昭和36年に(財)国民生活研究所が行った生活調査²⁾、さらに、後述する先行調査結果を参考に作成した。

3. 結果と考察

(1) 対象者の基本属性

今回、調査を行った対象者の基本属性は、表1と表2にまとめた通りである。対象者の

表1 基本属性 (1)

	全体	国立大(理系)	公立短大
	n=369 実数 (%)	n=229 実数 (%)	n=140 実数 (%)
所属大学			
1. 国立大 (理系)	229 (62.1)	229 (100.0)	-
2. 公立短大	140 (37.9)	-	140 (100.0)
合計	369 (100.0)	229 (100.0)	140 (100.0)
性別			
1. 男	200 (54.2)	198 (86.5)	2 (1.4)
2. 女	169 (45.8)	31 (13.5)	138 (98.6)
合計	369 (100.0)	229 (100.0)	140 (100.0)
年齢			
1. 18歳	83 (22.5)	55 (24.0)	28 (20.0)
2. 19歳	227 (61.5)	124 (54.3)	103 (73.6)
3. 20歳	47 (12.7)	39 (17.0)	8 (5.7)
4. 21歳以上	12 (3.3)	11 (4.7)	1 (0.7)
合計	369 (100.0)	229 (100.0)	140 (100.0)
出身地			
1. 鹿児島市内	129 (35.0)	56 (24.5)	73 (52.1)
2. 鹿児島市外-鹿児島県内	119 (32.2)	66 (28.8)	53 (37.9)
3. 鹿児島県外-九州	92 (24.9)	80 (34.9)	12 (8.6)
4. 鹿児島県外-四国	3 (0.8)	3 (1.3)	0 (0.0)
5. 鹿児島県外-中国	3 (0.8)	3 (1.3)	0 (0.0)
6. 鹿児島県外-関西	3 (0.8)	3 (1.3)	0 (0.0)
7. 鹿児島県外-東海	6 (1.6)	6 (2.6)	0 (0.0)
8. 鹿児島県外-関東	4 (1.1)	4 (1.8)	2 (1.4)
9. 鹿児島県外-北陸、東北	2 (0.5)	2 (0.9)	0 (0.0)
10. 外国	3 (0.8)	3 (1.3)	0 (0.0)
N.A.	3 (0.8)	3 (1.3)	0 (0.0)
合計	369 (100.0)	229 (100.0)	140 (100.0)
居住			
1. 親、家族と同居	182 (49.3)	81 (35.4)	101 (72.1)
2. 1人住まい	170 (46.1)	138 (60.3)	32 (22.9)
3. 親とは別居、兄弟など	10 (2.7)	4 (1.8)	6 (4.2)
4. 寮	6 (1.6)	5 (0.4)	1 (0.7)
5. その他	1 (0.3)	1 (2.2)	0 (0.0)
合計	369 (100.0)	229 (100.0)	140 (100.0)

男女比は、対象校によって偏りが見られ、国立大（理系）では86.5%が男、公立短大では98.6%が女であった。ただし、全体における男女比はほぼ半々となった。年齢は、想定した通り、全体の96.7%を20歳以下が占め、同じ大学生でも若年層を対象としたい今回の調査目的にかなう年齢の対象者であった。出身地は、公立短大の90.0%が鹿児島県内の出身者であったのに対し、国立大（理系）では県内出身者が53.3%と半数で、それ以外は国外を含め日本各地であった。居住方法は、国立大（理系）の60.3%が一人住まいだったのに対し、公立短大は72.1%が親や家族と同居していた。親からもらう1ヶ月の小遣い額は、国立大（理系）、公立短大とも0円が最も多かった。なかに、質問の意図が汲み取れず、仕送りの額をそのまま回答した対象者がいたため、高額回答については正確な小遣いの額を把握できなかった。1ヶ月のアルバイト額は、いずれも0円が多かったが、次に多かったのは40,000円から50,000円であった。70,000円以上と回答した者も、国立大（理系）で6.1%、公立短大で4.3%と少なくなかった。父親の年齢は、国立大（理系）で最も多かったのは46～50歳（41.9%）、次が51～55歳（33.6%）で、公立短大では51～55歳（41.4%）、

46～50歳（35.7%）の順であった。母親の年齢はいずれの対象者も、46～50歳が最も多く、親の年齢については、2つの対照校間に大きな差はなかった。

基本属性について国立大（理系）と公立短大を比較すると、男女比と出身地、居住方法で顕著な差が見られた。次に予定している報告（第3報）では、クロス集計を用いて、これらの差の影響も検討していく予定である。

表2 基本属性(2)

	全体	国立大(理系)	公立短大
	n=369	n=229	n=140
	実数 (%)	実数 (%)	実数 (%)
親からもらう小遣い(1ヶ月)			
	n=369	n=229	n=140
1. 0円	105 (28.5)	49 (21.4)	56 (40.0)
2. ～5,000円	27 (7.3)	13 (5.7)	14 (10.0)
3. ～10,000円	37 (10.0)	16 (7.0)	21 (15.0)
4. ～15,000円	10 (2.7)	5 (2.2)	5 (3.6)
5. ～20,000円	25 (6.8)	19 (8.3)	6 (4.3)
6. ～25,000円	5 (1.4)	3 (1.3)	2 (1.4)
7. ～30,000円	24 (6.5)	19 (8.3)	5 (3.6)
8. ～50,000円	48 (13.0)	38 (16.6)	10 (9.3)
9. 50,000円以上	47 (12.7)	44 (19.2)	3 (9.3)
10. N.A.	41 (11.1)	23 (10.0)	18 (12.9)
合計	369(100.0)	229(100.0)	140(100.0)
アルバイト料(1ヶ月)			
1. 0円	126 (34.1)	93 (40.6)	33 (23.6)
2. ～20,000円	22 (6.0)	15 (6.6)	7 (5.0)
3. ～30,000円	29 (7.9)	11 (4.8)	18 (12.9)
4. ～40,000円	47 (12.7)	24 (10.5)	23 (16.4)
5. ～50,000円	42 (11.4)	25 (10.9)	17 (12.1)
6. ～60,000円	27 (7.3)	16 (7.0)	11 (7.9)
7. ～70,000円	20 (5.4)	16 (7.0)	4 (2.9)
8. 70,000円以上	20 (5.4)	14 (6.1)	6 (4.3)
9. N.A.	36 (9.6)	15 (6.6)	21 (15.0)
合計	369(100.0)	229(100.0)	140(100.0)
父親の年齢			
1. ～40歳	2 (0.5)	2 (0.9)	0 (0.0)
2. 41～45歳	31 (8.4)	15 (6.6)	16 (11.4)
3. 46～50歳	146 (39.6)	96 (41.9)	50 (35.7)
4. 51～55歳	135 (36.6)	77 (33.6)	58 (41.4)
5. 56～60歳	17 (4.6)	9 (3.9)	8 (5.7)
6. 61歳～	3 (0.8)	3 (1.3)	0 (0.0)
7. N.A.	35 (9.4)	27 (11.8)	8 (5.7)
合計	369(100.0)	229(100.0)	140(100.0)
母親の年齢			
1. ～40歳	5 (1.4)	4 (1.7)	1 (0.7)
2. 41～45歳	96 (26.0)	53 (23.1)	43 (30.7)
3. 46～50歳	179 (48.5)	115 (50.2)	64 (45.7)
4. 51～55歳	58 (15.7)	34 (14.8)	24 (17.1)
5. 56～60歳	3 (0.8)	2 (0.9)	1 (0.7)
6. 61歳～	1 (0.2)	1 (1.3)	0 (0.0)
7. N.A.	27 (7.3)	20 (8.7)	7 (5.0)
合計	369(100.0)	229(100.0)	140(100.0)

(2) 生活

1) 生活時間

平日の平均的な生活時間について尋ねた結果は、図1-1から図1-6にまとめた通りである。睡眠時間については、全体で5時間～6時間が42.8%と最も多く、次が、6時間～7時間で22.5%であった。生活時間については、これまでに様々な調査が行われてきたが、大学生協が毎年大規模に行っている学生の生活実態調査結果³⁾によれば、全国平均は男女とも、6.8時間となっている。今回の調査対象者は、全国平均より睡眠時間が少ないことが分

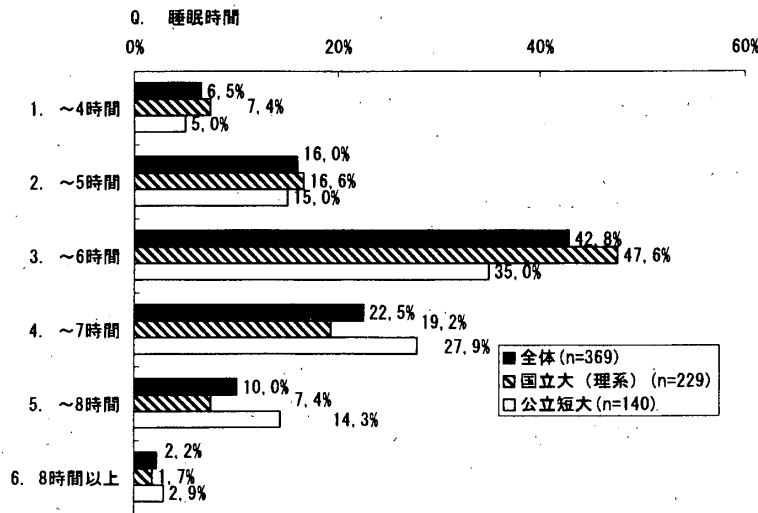


図1-1 生活時間(1)

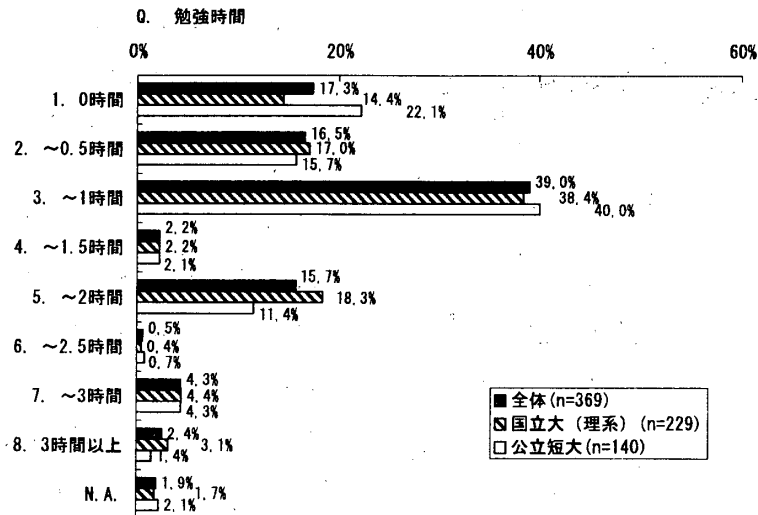


図1-2 生活時間(2)

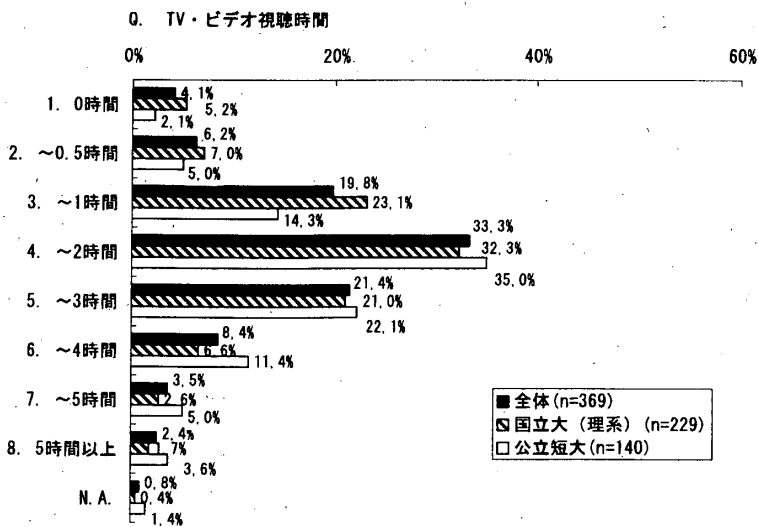


図1-3 生活時間(3)

かった。その原因と考えられるのは、国立大（理系）の睡眠時間の少なさである。4時間以下と答えた者も7.4%おり、6時間以下が7割を占めていた。それに対し、公立短大では17.2%が7時間以上の睡眠をとると回答していた。勉強時間については、0.5時間～1時間が、全体、国立大（理系）、公立短大ともに最も多かった。次に多かったのは、国立大（理系）で1.5時間～2時間（18.3%）、公立短大で0時間（22.1%）であったが、国立大（理系）も公立短大も3割以上が0.5時間以下と回答し、3時間以上勉強すると答えた者は1割に満たなかった。TV・ビデオ視聴時間については、最も多かった回答は、全体、国立大（理系）、公立短大ともに1時間～2時間で、いずれも3時間までの回答で7割を超えた。新聞・読書時間は、0時間が最も多く、0.5時間と回答した者と併せて70%の回答を得た。この結果は、国立大（理系）と公立短大の間に差は見られな

かった。インターネットを使用する時間については、全体、国立大（理系）、公立短大とも

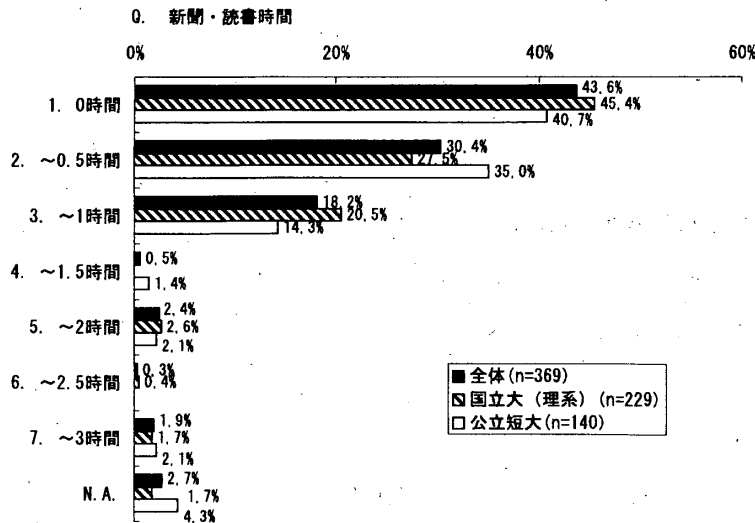


図1-4 生活時間(4)

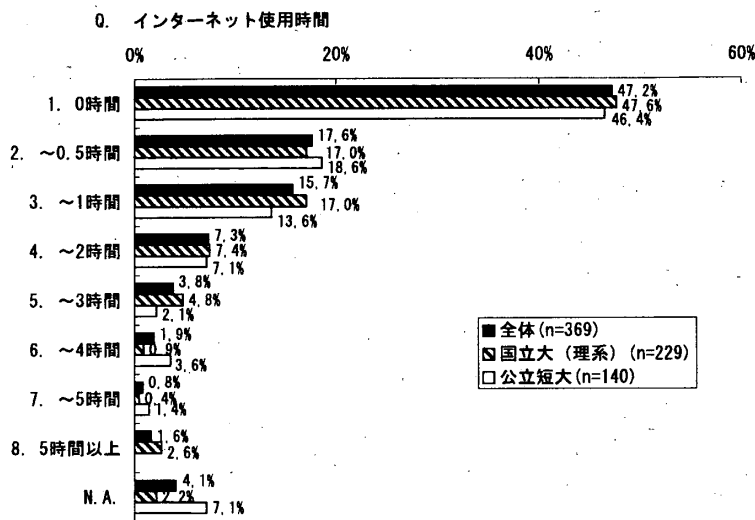


図1-5 生活時間(5)

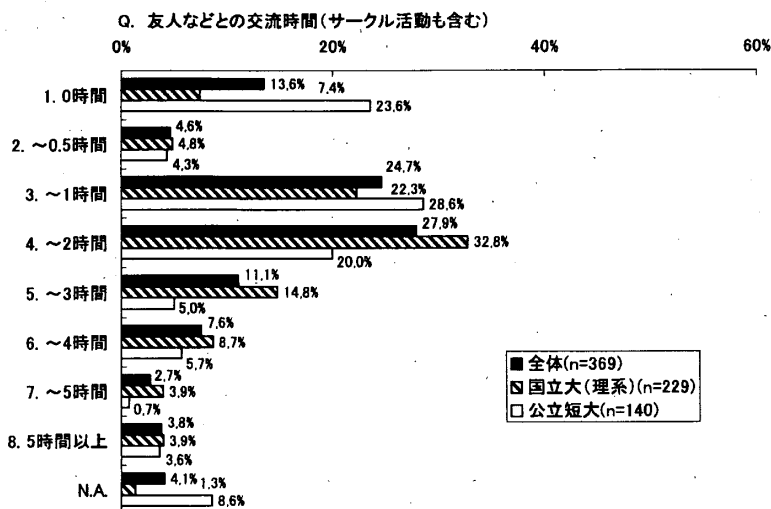


図1-6 生活時間(6)

に0時間が最も多く半数近くがそうであった。国立大(理系)では5時間以上と回答する者も2.6%いた。ただこの項目については、授業での使用を区別しておらず、設問に工夫が必要であったと考える。その点を考慮しても、パソコン、インターネットの使用環境が整ってきた現在において0時間が半数を占めた結果は予想外であった。友人などとの交流時間(サークル活動も含む)については、国立大(理系)で1時間~2時間(32.8%)、0.5時間~1時間(22.3%)の順に多かったが、公立短大では、0.5時間~1時間(28.6%)、0時間(23.6%)の順であった。いずれの大学も、0.5時間~2時間と回答した者が半数近くを占めたが、0時間と答えたのは、国立大(理系)で7.4%、公立短大で23.6%と顕著な差が見られた。調査者の印象としては、サークルの活動状況の相違が原因だと考えられる。基本属性において居住方法に2校間で差が現れたが、

一人暮らしの多い国立大(理系)はサークル活動を始めた友人との交流に時間を充分

に取れる、あるいは取らざるを得ない生活実態なのではないかと推測できる。この点も、次の報告でクロス集計により明らかにしたい。

2) 生活に対する満足感

日常生活における物質面、心の面、環境面、対人面に対する満足感を尋ねた結果は、図2-1から図2-3に示す。物質面、環境面、対人面については、全体、国立大（理系）、公立短

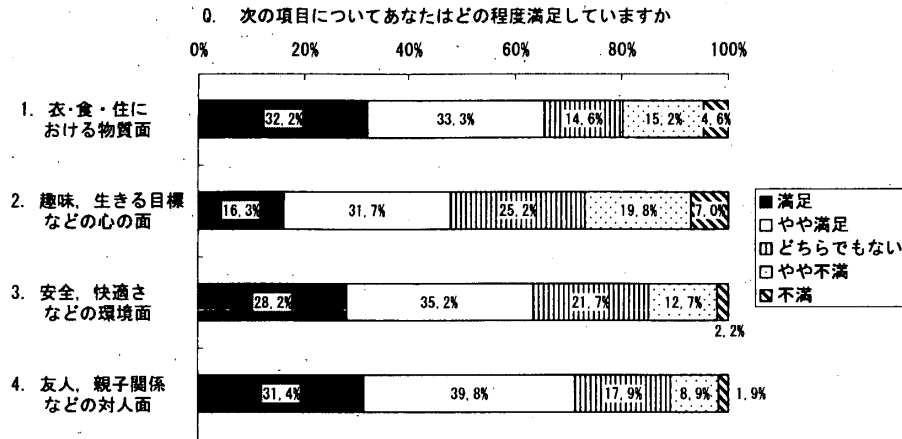


図2-1 生活に対する満足感（全体 n=369）

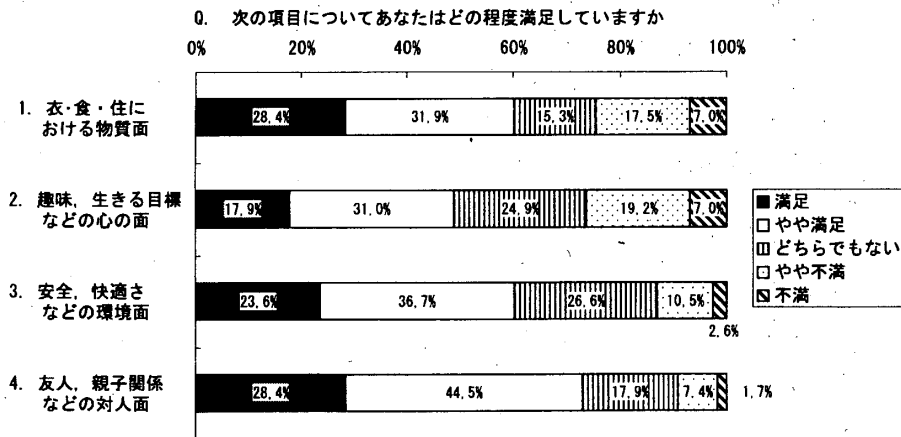


図2-2 生活に対する満足感（国立大（理系）n=229）

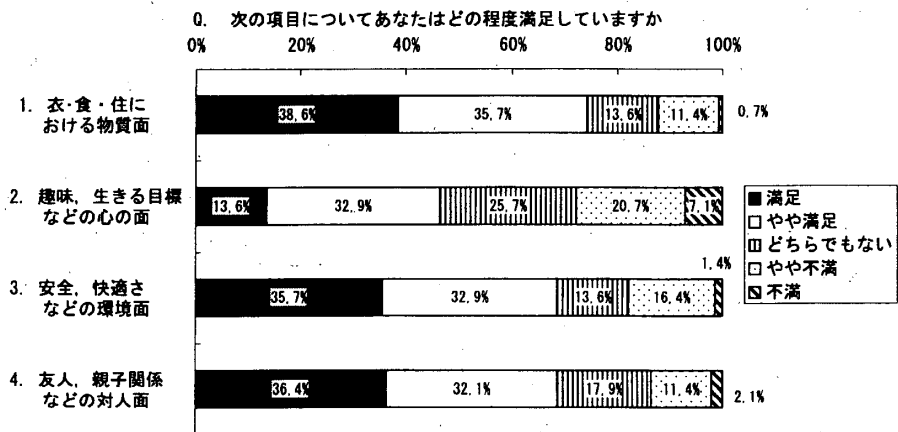
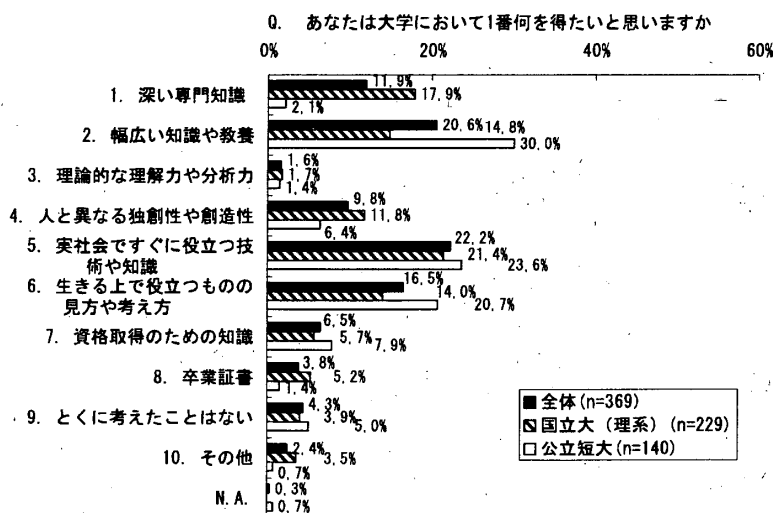


図2-3 生活に対する満足感（公立短大 n=140）

大とも、「満足」と「やや満足」を併せて50%を超えたが、心の面は半数に満たなかった。とくに、「満足」と回答した者は2校の対象者とも20%以下であった。この質問は、1999年に行ったプレ調査でも行っており、結果の傾向は今回と似通っている。ただ、心の面については1999年の調査対象者の方が満足感が低く（「満足」：8.4%、「やや満足」：22.1%）、些少ではあるが心の面での満足感が高くなってきている。設問作成の際に参考にしたNHK放送文化研究所の調査⁴⁾では25年間の推移をまとめているが、全ての年齢層で「衣食住の物質面」「地域の環境面」に対する満足感は漸増し、「生きがい」「人間関係」の満足感は漸減していると報告されている。また、4つの面に対する満足感は、男性より女性の方が高いという特徴を捉えている。今回調査の2校の対象者間で差が現れたのは、環境面に対して「満足」と答えた割合であった。国立大（理系）では23.6%であったのに対し、公立短大では35.7%と高かった。これは、前者に一人暮らしが多く、後者では自宅生が多いという若年対象者の基本属性の相違が影響していると考えられる。

3) 学業の目的

それぞれに通う大学での学業の目的を質問した結果は、図3の通りである。国立大（理系）



系)では「実社会ですぐに役立つ技術や知識」(21.4%)が最も多く、次は「深い専門知識」(17.9%)であった。公立短大では「幅広い知識や教養」(30.0%)、「実社会ですぐに役立つ技術や知識」(23.6%)の順となった。「実社会ですぐに役立つ技術や知

識」については、いずれの大学の対象者にも目的として挙げられたが、「深い専門知識」と「幅広い知識や教養」では顕著な差が現れ、国立大（理系）は「幅広い知識や教養」より「深い専門知識」を目的に大学に通うのに対し、公立短大では「深い専門知識」より「幅広い知識や教養」を必要としていることが今回の調査では明らかになった。この項目も、1999年に行ったプレ調査で質問している。プレ調査では、調査者が勤務する公立短大生だけを対象としたが、「幅広い知識や教養」が最も多く、次は「実社会ですぐに役立つ技術や知識」と、今回と同じ順序であった。回答率は1999年の調査の方が高く(42.7%)、「幅広い知識や教養」を大学で得たいという気持ちが強かったことがわかる。

4) 大学生活に対する満足感

大学生活を学業全般、対人関係、施設面に分け、さらに、所属大学の学生であることという項目を加えて、それらに対する満足感を尋ねた結果は、図4-1から図4-3に示す。「大学

の講義など学業全般」に対する回答は、国立大（理系）と公立短大では同じ傾向が現れ、「満足」は5%以下と低く、「不満」と「やや不満」を併せると30%を超えた。この項目も1999年のプレ調査で質問しているが、「大学の講義など学業全般」に対する回答は同じ結果であった。「大学の施設面」に対する回答は、2校の対象者間で差は見られなかったが、「大学での友人、対人関係」と「所属大学の学生であること」に対する回答では、国立大（理系）より公立短大の方が「満足」の割合が高い点が今回異なっていた。

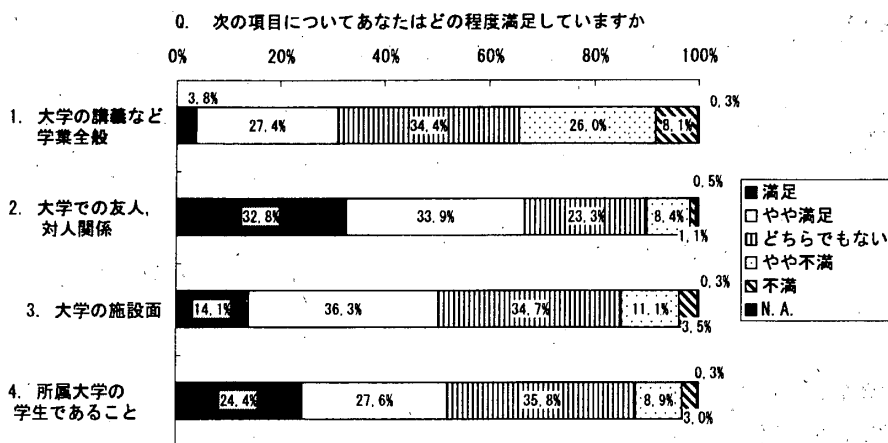


図4-1 大学生活に対する満足感（全体 n=369）

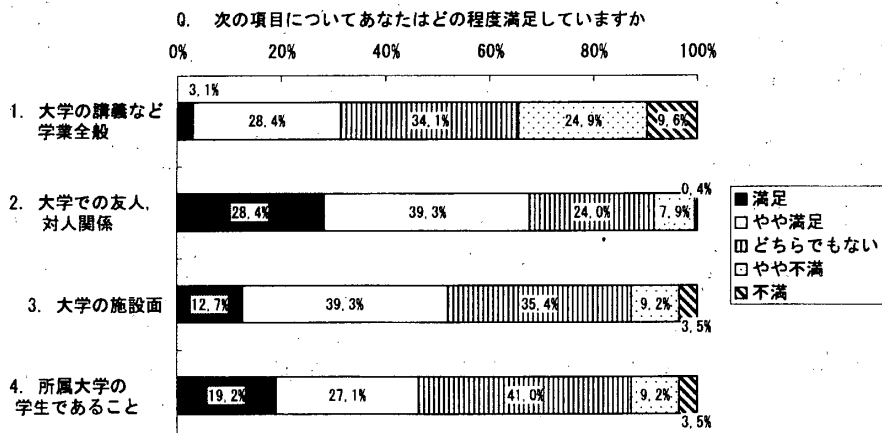


図4-2 大学生活に対する満足感（国立大（理系） n=229）

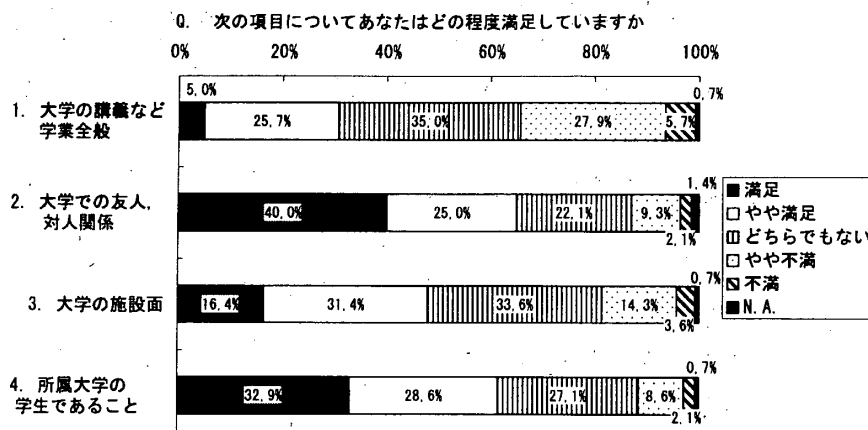


図4-3 大学生活に対する満足感（公立短大 n=140）

5) アルバイト

アルバイトの経験を尋ねた結果は、図5、アルバイトの目的は、図6、アルバイトの功罪

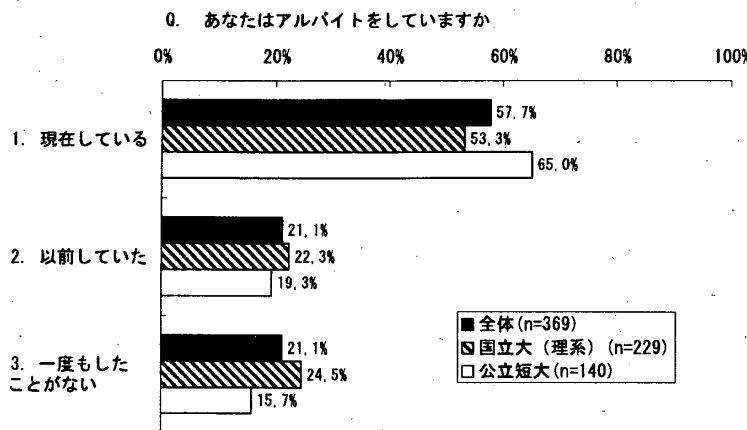


図5 アルバイトの経験

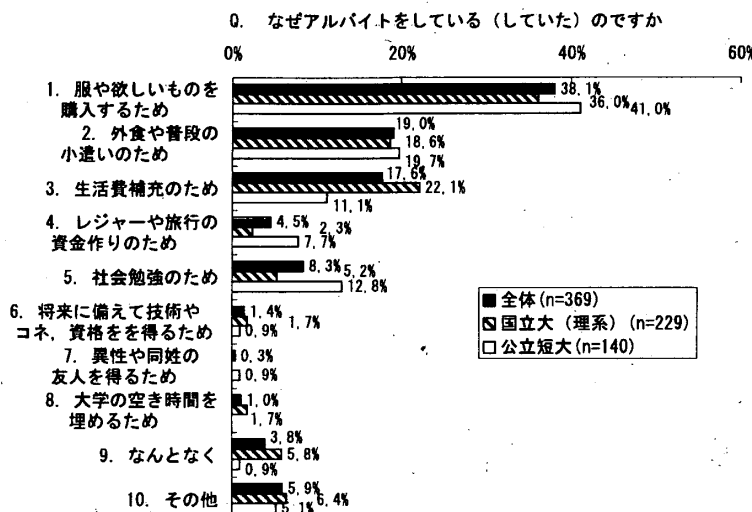


図6 アルバイトの目的

は、図7-1から図7-3の通りである。アルバイトの経験は、2校の対象者間で大きな差は見られなかったが、公立短大の方が経験者が多く、国立大(理系)では「一度もしたことがない」との回答が24.5%あった。アルバイトの目的は、全体、国立大(理系)、公立短大ともに「服や欲しい物を購入するため」が最も多く、「外食や普段の小遣いのため」が次に多かった。国立大(理系)では「生活費補充のため」と答えた者も多く(22.1%)、この点も、親から離れて一人暮らしをしていることが影響したと考えられる。

アルバイトを経験したことによる功罪を5つの面から尋ねた結果では、5つの面とも2校

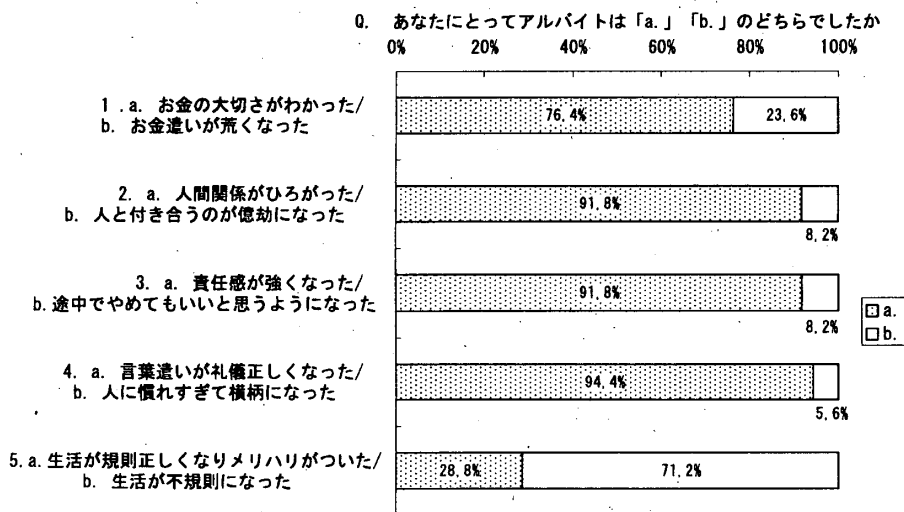


図7-1 アルバイトの功罪 (全体 n=249)

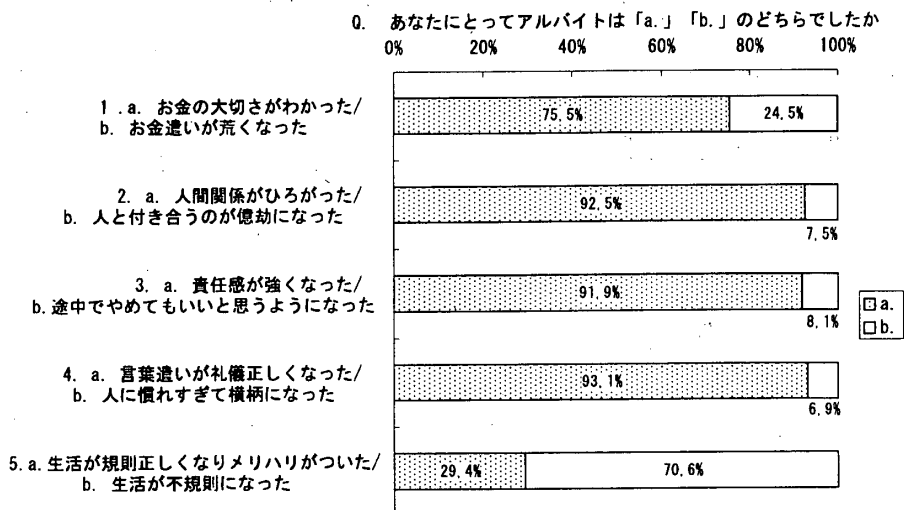


図7-2 アルバイトの功罪 (国立大 (理系) n=172)

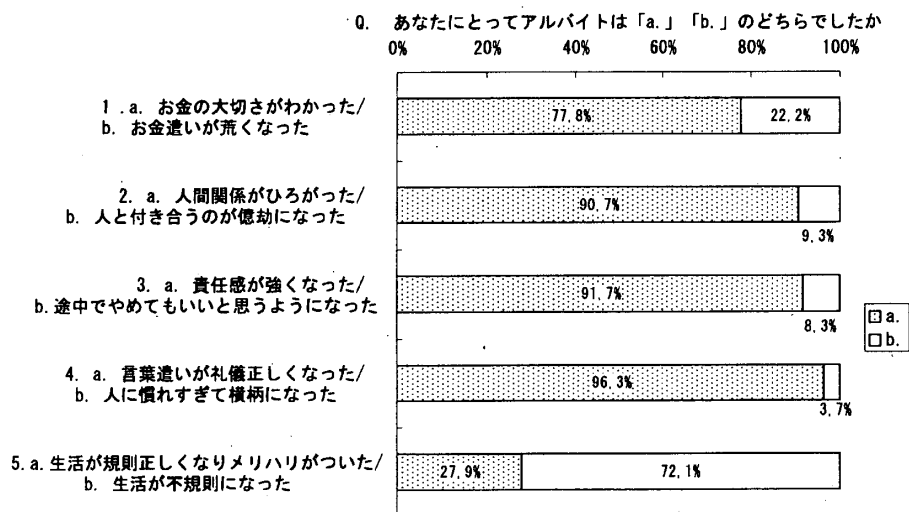


図7-3 アルバイトの功罪 (公立短大 n=117)

の対象者間でほぼ同じ結果が出た。多くの者がアルバイトを経験して「生活が不規則になった」ほかは、「お金の大切さがわかり」、「人間関係がひろがり」、「責任感が強くなり」、「言葉遣いが礼儀正しくなった」と答えている。この項目も1999年のプレ調査で質問しているが、今回の結果とほぼ同じ結果であった。アルバイトが学業や大学での活動時間を圧迫すると考える大学関係者も多いが、学生である調査対象者はアルバイトで得た経験を肯定的に捉えている。同年齢のピアグループに安住する大学生に、社会性への風穴をあけるのがアルバイト経験なのではないかと考える。

6) 友人関係

親友の有無について質問した結果は、図8に、親しい友人との間に保っている関係を尋ねた結果は、図9-1から図9-3の通りである。親友の有無については図8が示すように、国立大 (理系) と公立短大の結果はほぼ同じで、親友は「たくさんいる」、「少ないがいる」と答えた者で8割を占めた。親しい友人との間に保っている関係については、2校の対象者間で差が現れた項目があった。「立ち入った付き合いは避けている」と回答したのは、国

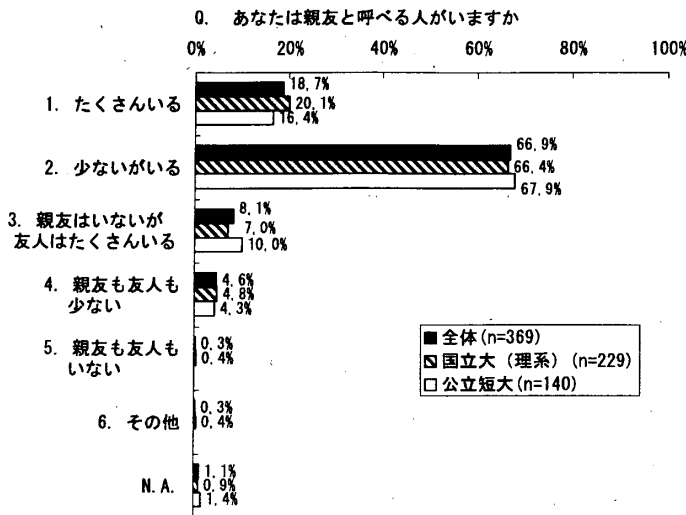


図8 親友の有無

結果には一人暮らしをする者の数が影響しているのではないと思われるため、次の報告においてその相関をクロス集計により明らかにしたい。「学校で会って話をする」と回答し

立大（理系）の方が多く、逆に「相手に嫌われないように気をつけている」のは、国立大（理系）より公立短大の方が多かった。「互いの家に行って話をする」と回答した数にも違いが現れた。国立大（理系）では49.8%と半数に近かったのに対し、公立短大では22.1%と低かった。前者の結果には各大学の対象者の男女比が、後者の

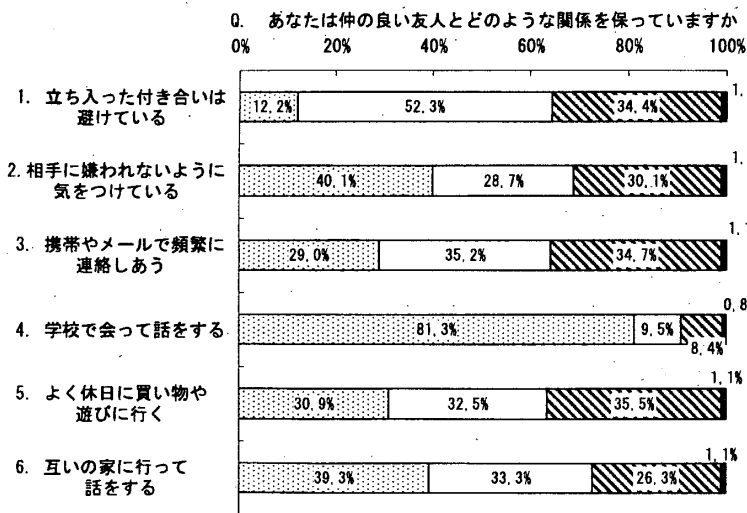


図9-1 友人関係 (全体 n=369)

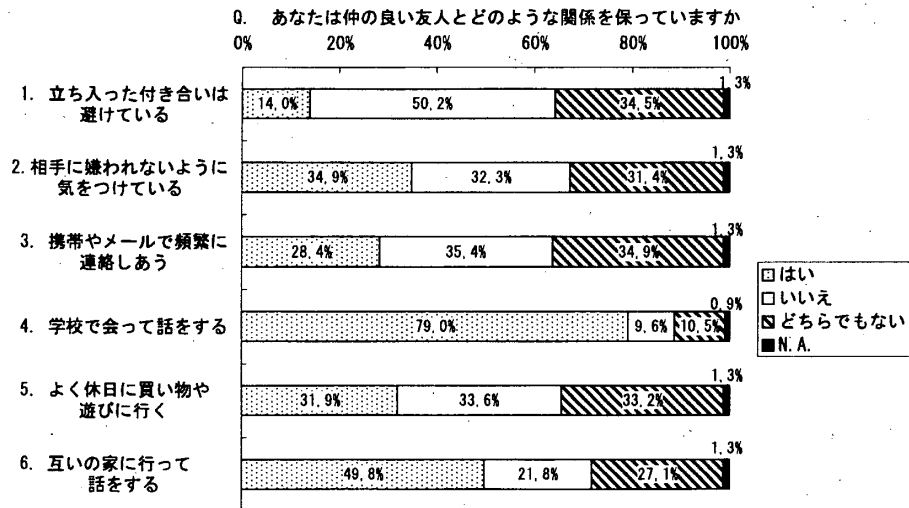


図9-2 友人関係 (国立大 (理系) n=229)

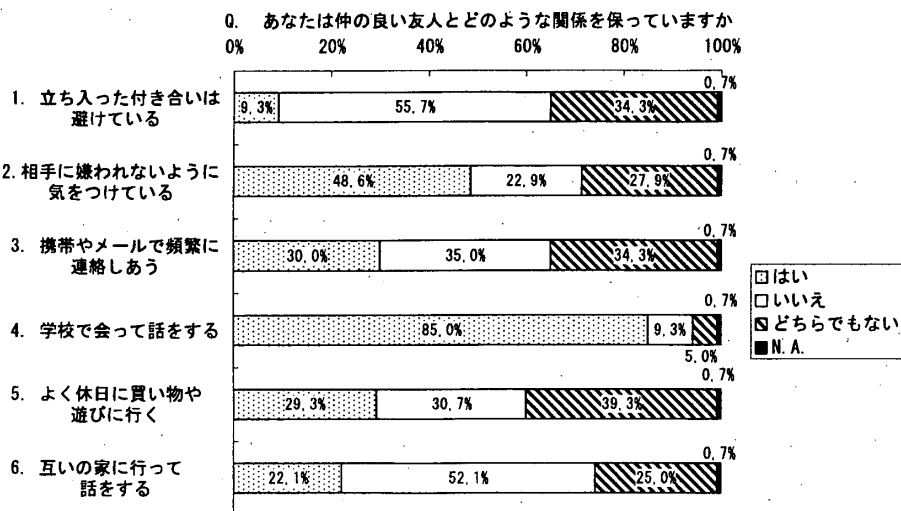


図9-3 友人関係 (公立短大 n=140)

た者は、いずれの大学の対象者も8割近かった。前述した通り、「大学生活での友人、対人関係」に対し、2校の対象者とも「満足」と「やや満足」の割合が多かったこととも併せて、大学での友人関係が充実している事を示す結果であると推測できる。

7) 生活の不安

生活の中で不安に感じていることを、自分の問題、家庭、交友、学校生活、時事問題、将来の問題の中から6以内で選択した結果は、図10に示す通りである。全体、公立短大ともに最も多かったのは「将来の問題-職業」であった。公立短大では86.1%と高く、次年度には就職活動を開始しなければならないという切実な気持ちを表す結果であった。国立大(理系)で最も多かったのは「学校生活-勉強」で、73.8%であったが、「将来の問題-職業」も72.0%と値が高く、同程度の不安を感じている結果となった。公立短大では「学校生活-勉強」(59.1%)対して国立大(理系)ほどの不安は感じてはいないことがわかった。「自分の問題-能力」(48.9%)については、公立短大では3番目に不安を感じているという結果を得たが、国立大(理系)では「自分の問題-能力」(41.8%)より「交友-恋愛」(45.8%)の方が不安の程度が高かった。「時事問題-戦争」に対しても、全体、国立大(理系)、公立短大ともに不安を感じる割合が高かった。調査を行った時

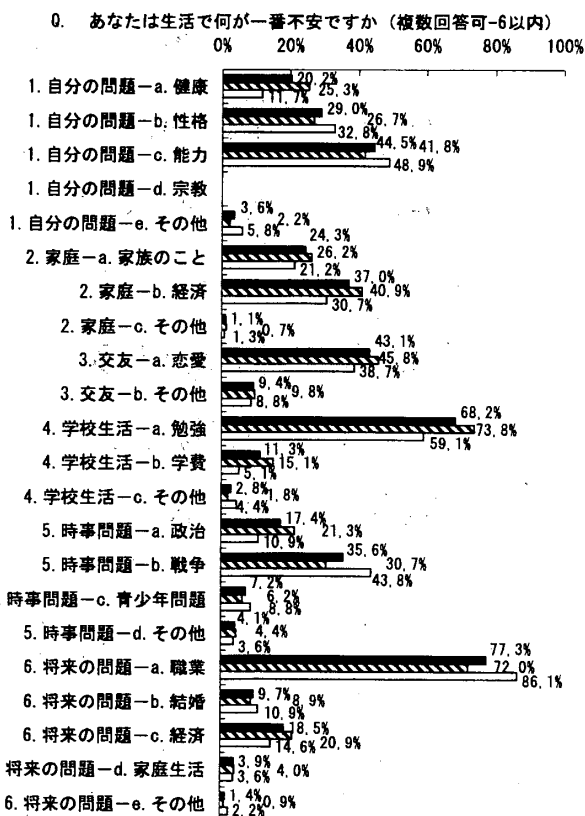


図10 生活の不安

調査を行った時

期は、イラク情勢に関する報道が多くされていたため、関心が向いたのではないかと考えられる。この設問は、昭和36年行われた若い世代を対象とする生活意識調査を参考にして作成した。調査地域や対象年齢は異なっているが、その結果の傾向は以下の通りであった。昭和36年の調査対象者は、「学校生活－勉強」(38.6%)と「時事問題－政治」(38.2%)に最も不安を感じ、次に、「将来－結婚」(33.4%)、「自分の問題－能力」(31.2%)と続いていた。当時の時代背景と相まって「時事問題－政治」に関心が高い点と、「交友－恋愛」よりも「将来－結婚」に不安を感じている点が今回の結果とは異なっている。しかし、昭和36年の結果の詳細を調べると、「将来－結婚」に不安を感じているのは女子学生で、その割合もかなり高く、男子学生は結婚より「交友－恋愛」に強い不安を感じている結果となっていた。「自分の問題－能力」についても、女子学生の不安の割合が高いのに対し、男子学生は「将来の問題－職業」がそうであった。この他にも、全体の割合とは異なり男女差の大きい項目が多くあった。今回の調査における印象では、このような男女差を感じなかったが、次の報告ではクロス集計により確認したいと考えている。

8) 親子関係

親子関係を検討するために、親との会話の内容を質問した結果は、図11-1から図11-3に

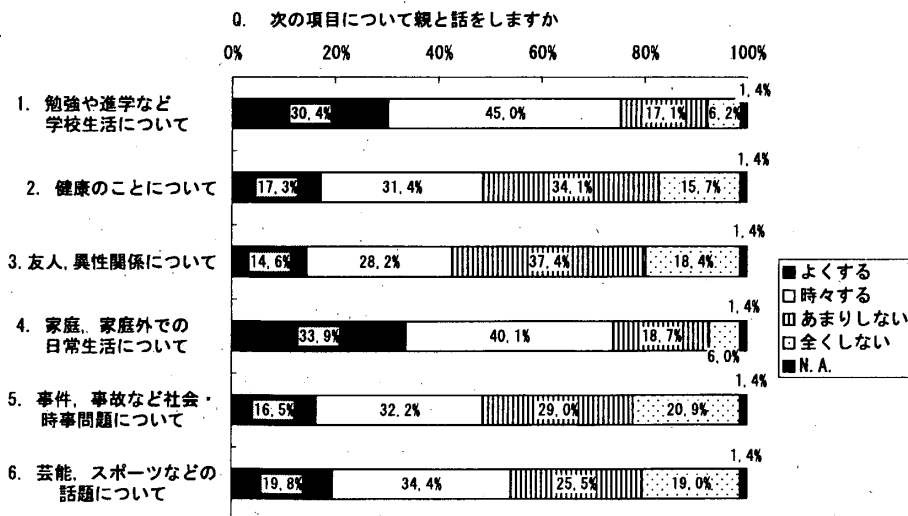


図11-1 親との会話 (全体 n=369)

示す通りである。全体の結果では、「勉強や進学などの学校生活」と「家庭、家庭外での日常生活」についての会話が多く、「よくする」「時々する」を併せて70%を超えた。ただし、この2つの項目は、2つの大学の対象者間で顕著な差が見られた。国立大(理系)ではどちらの項目も7割程度が「する」と答えたが、公立短大では「よくする」と答えた者が「勉強や進学などの学校生活」では41.1%、「家庭、家庭外での日常生活」では47.9%と半数近く、「時々する」を併せるといずれも8割以上が「する」と回答した。公立短大の方は、分類した6つの話題のうち、「健康」と「友人・異性関係」の話題以外の4つにおいて「会話をする」が7割程度いたが、国立大(理系)では、「学校生活」と「日常生活」以外の話題は「会話する」が5割に満たなかった。1999年のプレ調査でも同様の質問を行っている

が、異性関係を話題にすることは「全くしない」と答えた者が43.8%もあり、「あまりしない」を併せて7割を超えていた。この点は、今回の公立短大における対象者の回答と大きく異なる結果であった。

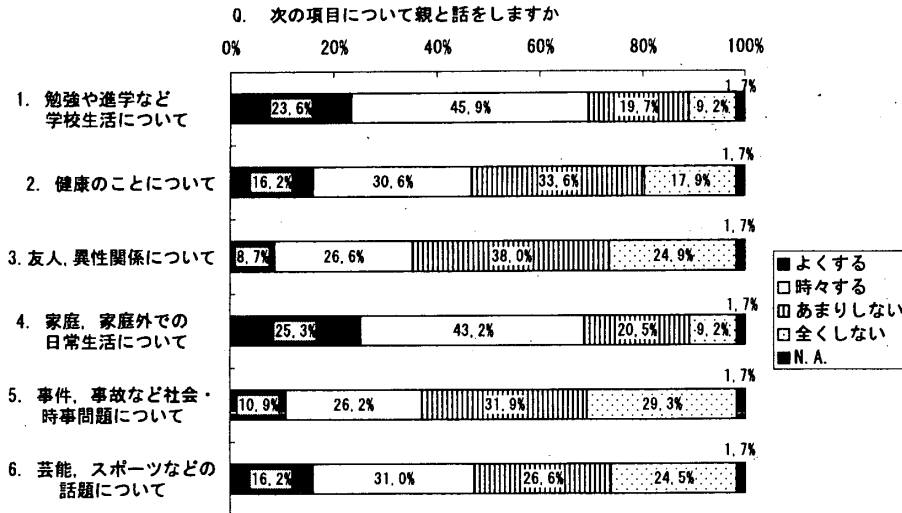


図11-2 親との会話（国立大（理系） n=229）

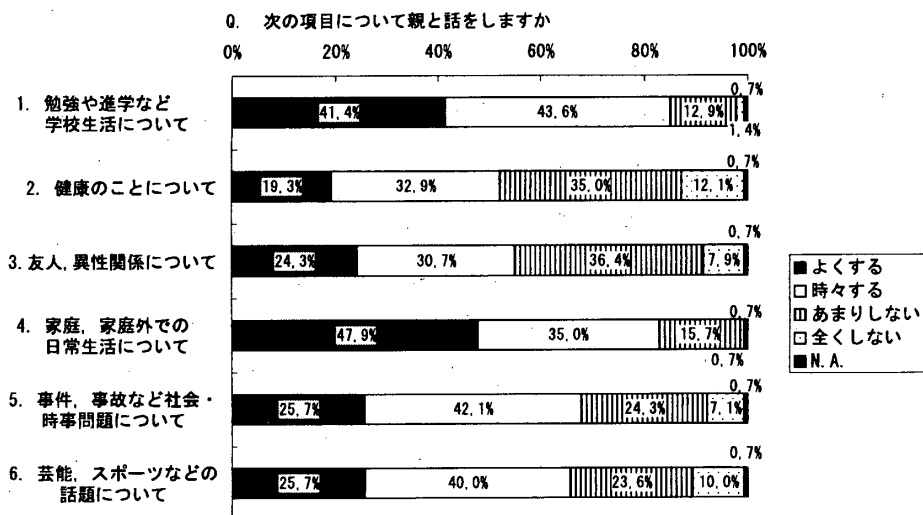


図11-3 親との会話（公立短大 n=140）

親から言われたことの内容を分析することで、親子関係を俯瞰したいと考えた設問の結果は、図12-1から図12-3に示す。全体の結果から、親から言われることが多かったのは「他人に迷惑にならないこと」「自分の責任は果たすこと」であることがわかった。逆に少なかったのは、「個性的であること」「他人に対して平等であること」であった。2つの対象者を比較すると、とくに公立短大の方が「他人に迷惑にならないこと」「自分の責任は果たすこと」を言われた割合が高く、さらに「明るく朗らかであること」も言われた者が多かった。これらについては、1999年のプレ調査でも同様の傾向を示している。質問項目作成の際に参考とした先行研究⁵⁾では、このような設問からしつけの理念が浮き上がるとして、日米の高校生で比較している。それによれば、日本の家庭では対立葛藤を避ける生き方を「しつけ」という手段によってメッセージとして伝えているという。今回の調査で

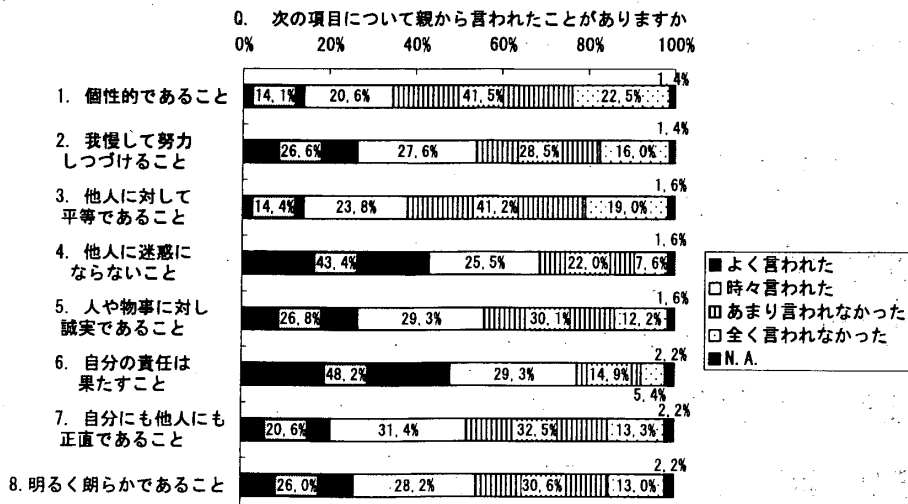


図12-1 親から言われたこと (全体 n=369)

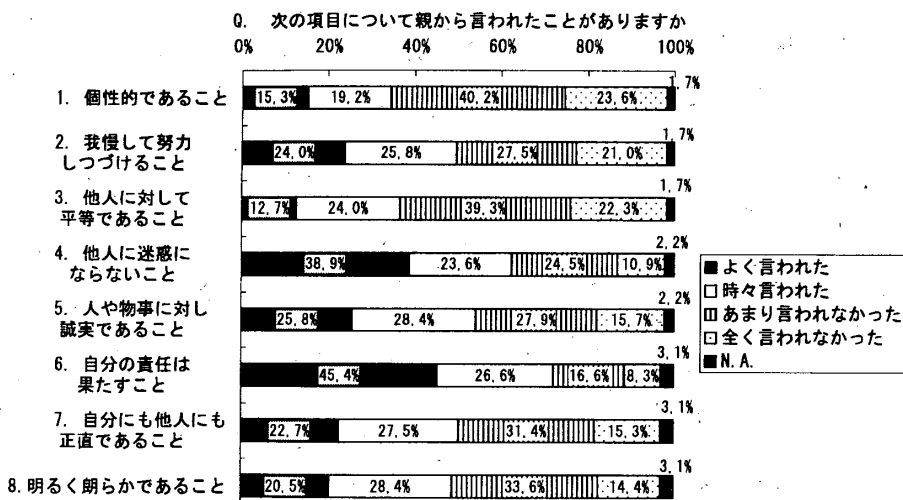


図12-2 親から言われたこと (国立大 (理系) n=229)

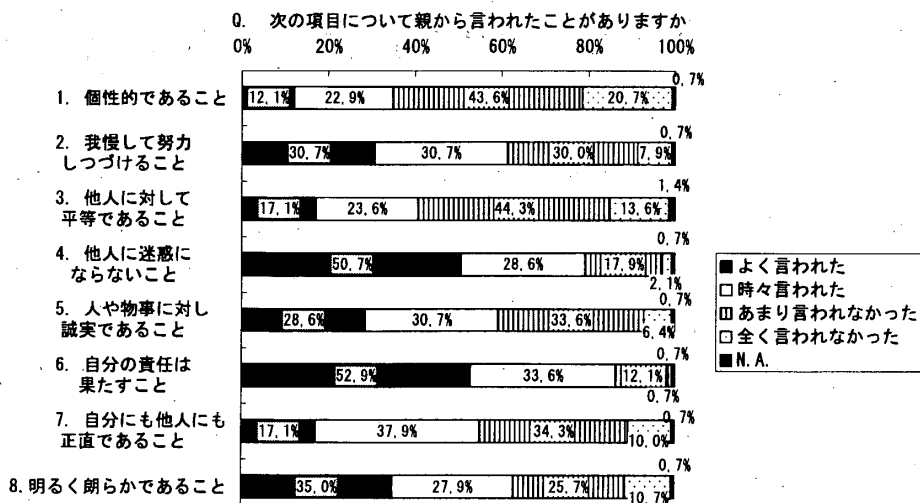


図12-3 親から言われたこと (公立短大 n=140)

も、「他人に迷惑にならないように」と他者との対立を上手く避けさせ、若年層にも「自分の責任は果たせ」と高い自己完結性を求める調査対象者の親の「しつけ」が伝わる。そし

て、「個性」と「平等」には親の関心が低いことが示された。NHKのキャスターをつとめる池上彰によれば、番組に出演している中学生の女の子が、「差別ってなあに?」「差別はいけないと言っていたけど、なんのことかわからなかったの」と言うのを聞いて、自分たちおとなに厳しく反省を迫る言葉だと感じたと言っている⁶⁾。「個性的」であれと子どもを育てるより、「他人に迷惑にならないように」と言い聞かせることで、個性が目立たない子どもが増える。皆が同じように見えるから、他人に対してわざわざ「平等」に接する必要はない。一見、構成員が一様で平等に見える社会に、「差別」を感じる子どもがいなくなるという構図が透けて見えてくる結果であった。

9) 食生活

どのような形態で平日の朝食と夕食を取っているかを質問した結果は、図13-1から図13-2の通りである。朝食については、全体、国立大(理系)、公立短大のいずれも「ひとり」で食べると答えた対象者が6割ほどいた。国立大(理系)は「食べない」者も多く、22.7%であった。夕食については、2つの対象者で大きな差が見られ、国立大(理系)では「ひとり」(55.0%)が最も多く、次が「友人」(16.6%)であった。それに対し、公立短大では「家族全員」(45.7%)が最も多く、次が「ひとり」であった。夕食についての結果は、先に示した「一人住まい」と「家族と同居」という住居方法の相違との相関が高いと考えられる。

平日の朝食と夕食の準備に

ついて質問した結果は、図14-1から図14-2の通りである。朝食も夕食も、国立大(理系)は「自分が作る」、公立短大は「家族が作る」が最も多かった。さらに、平日の夕食では、出来合いの弁当などを利用するの者が国立大(理系)に14.0%いた。これらの結果も、前述の食事摂取時の形態結果と同様に、居住方法との高い相関が予想される。

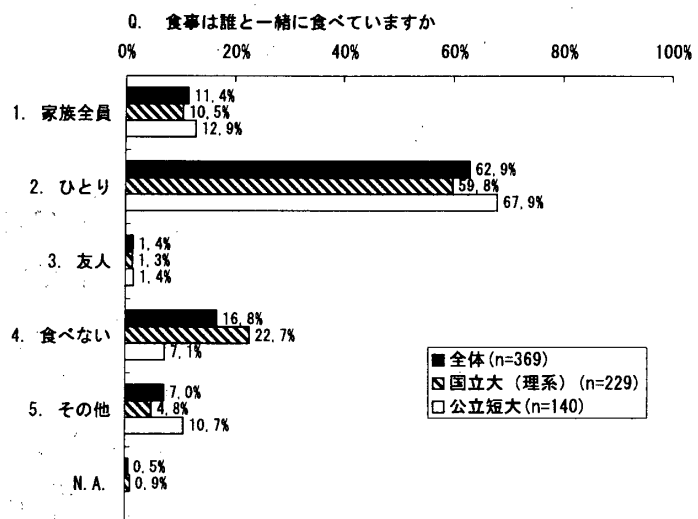


図13-1 食風景 (平日の朝食)

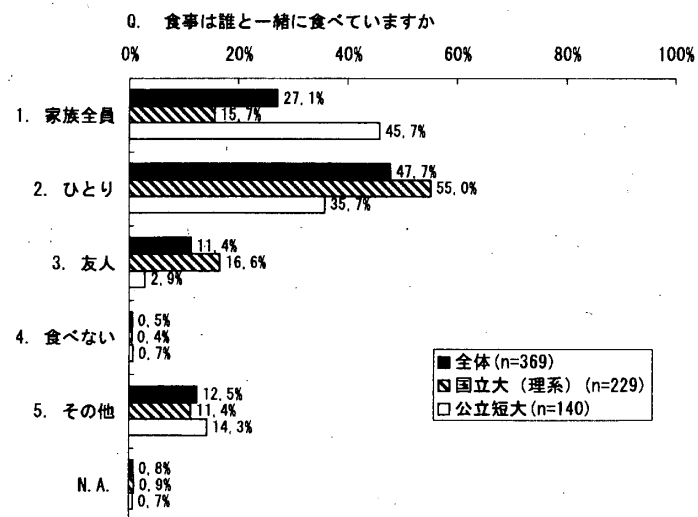


図13-2 食風景 (平日の夕食)

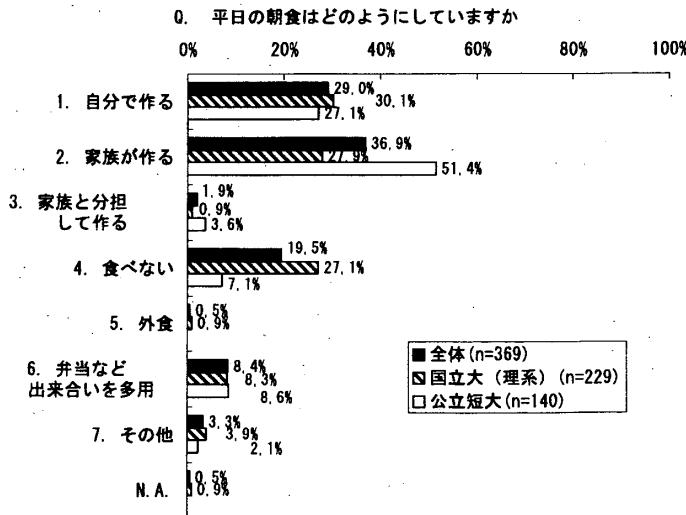


図14-1 食生活 (平日の朝食)

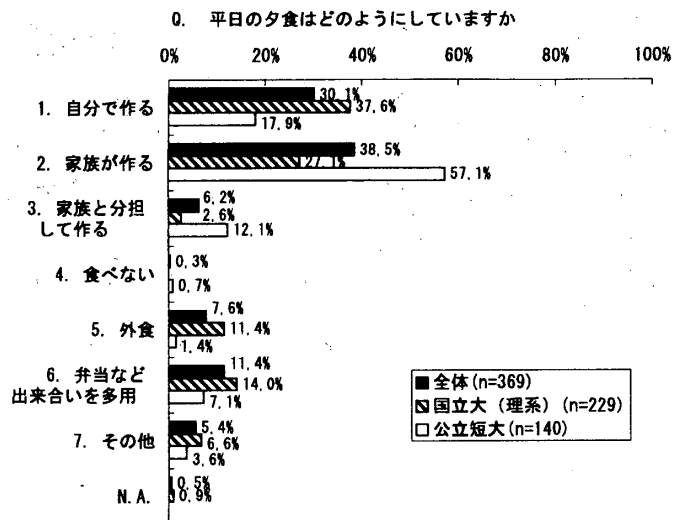


図14-2 食生活 (平日の夕食)

(2) 身体

1) 健康

若年層の大学生が自分の健康面にどの程度留意しているかを尋ねた結果は、図15-1から図15-3に示す。全体、国立大 (理系)、公立短大とも、同じ傾向の結果を得た。「健康面に気になることがある」(全体:「はい」「やや」64.5%) ため、「健康に気を使い」(全体:「はい」「やや」74.8%)、「栄養のバランスに気を使っている」(全体:「はい」「やや」併せて52.8%) ことがわかるが、「健康保持のために何かしている」(全体:「あまり」「いいえ」59.6%) 者は多くない。若年層を対象とした調査では、このような質問は少なく先行研究結果との比較はできないため推測であるが、高齢者と同様に自分の健康には関心が高い。しかし、高齢者のようにマスメディアで得た情報をもとに具体的な方策を講じるほどの関心の高さではないのではないかと印象を受ける。1999年のプレ調査結果でもほぼ同様の結果であったが、「できるだけ体を動かすようにしている」と回答した割合は今回と異なり6割を超えていた。

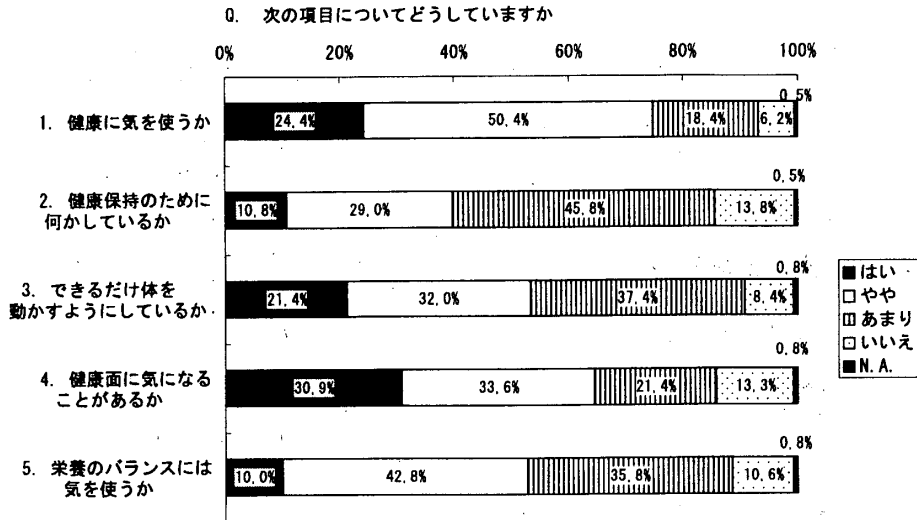


図15-1 健康への留意 (全体 n=369)

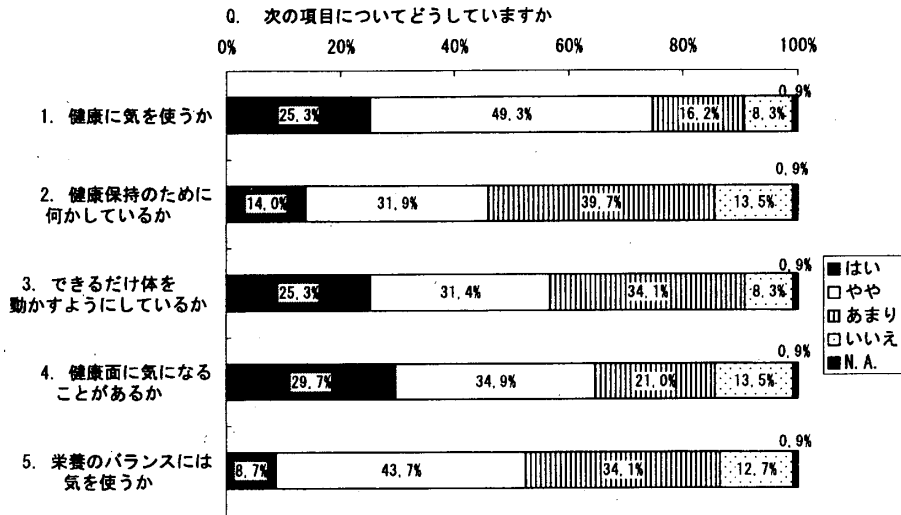


図15-2 健康への留意 (国立大 (理系) n=229)

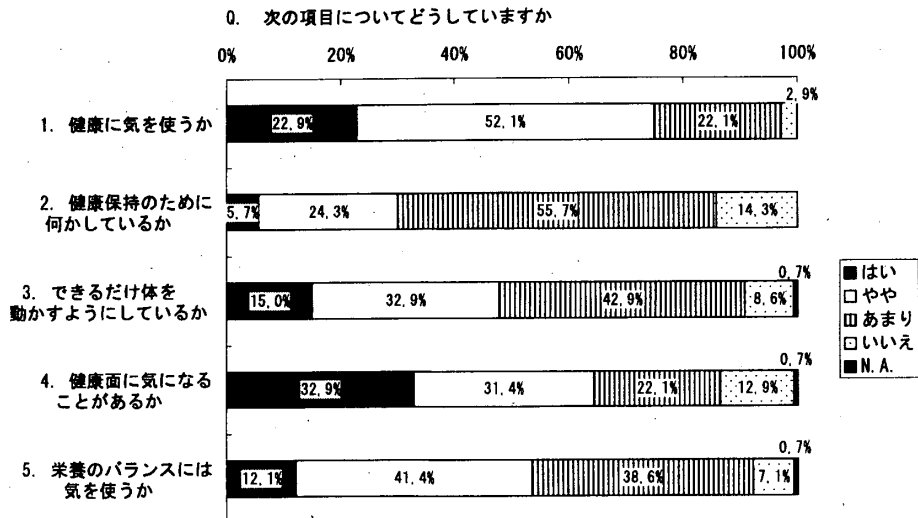


図15-3 健康への留意 (公立短大 n=140)

2) 身体感覚

自分の体をどのように認識しているかについて質問した結果は、図16に示す通りである。

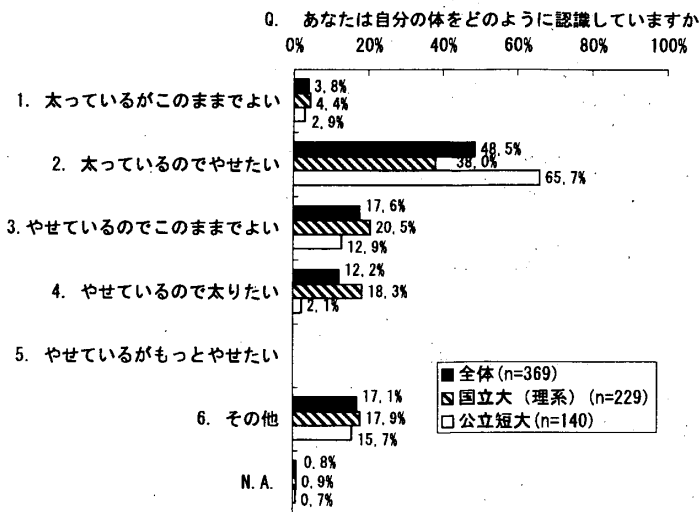


図16 身体感覚

結果は、全体、国立大（理系）、公立短大で異なり、それぞれの特徴が現れた。「太っているがやせたい」と回答した者は、国立大（理系）で38.0%と低かったため全体では半数に満たなかったが、公立短大では65.7%を占めた。他に2つの大学の対象者間で差が大きかった回答は「やせているので太りたい」の項目で、国立大（理系）では18.3%であっ

たのに対し、公立短大は2.1%と少なかった。「その他」に書かれた内容が多かったのは、国立大（理系）では「筋肉をつけたい」、公立短大では「ちょうどよいがやせたい」であった。1999年のプレ調査でも同様の質問を試みているが、「太っているがやせたい」と答えた者が68.7%と今回とほぼ同じ結果であった。その際は、自分の正確な肥満度を捉えようとせず、ただ痩せたいと望む対象者を「メディアによって植え付けられた痩身イデオロギーに縛られている」と考察したが、今回の調査では、結果に大学間の差が大きいことが明らかになった。つまり、対象者を構成する男女比が大学間の回答差に影響を及ぼしたと考えられ、「その他」を含めた今回の結果から、「痩身イデオロギー」に縛られているのは女子学生に多く、男子学生は「筋肉崇拜主義」に縛られつつあるのではないかと推測できる。この調査内容に関する話題は、マスコミに取り上げられることが少なくなったが、最近また、厚生労働省の「2002年国民栄養調査」の結果として報道された（日本経済新聞 2003/12/25）。それによると、体重、身長から算出した肥満度と体重に対する自己評価を比較した結果、10代の女性では実態とその評価は乖離しており過剰とも思える痩身願望を裏付けたという。今回の調査では身長と体重も調査しているので、次回の報告では肥満度を算出し、それと身体に対する自意識との相関も考察したいと考える。

3) 心身の状態

心身の状態について5項目を挙げ、自覚する頻度について質問した結果は、図17-1から図17-3に示す通りである。「寝不足になる」と「なんとなく体がだるい」についての結果は、2つの対照校間で大きな相違は見られなかった。「何かする気力がない」「責任あることに関わりたくない」「イライラする」については、結果に差が現れ、公立短大の方が「よくある」「時々ある」の割合が高かった。1999年のプレ調査と比較すると、5つの項目とも今回の結果の方が、「よくある」「時々ある」の割合が増している。

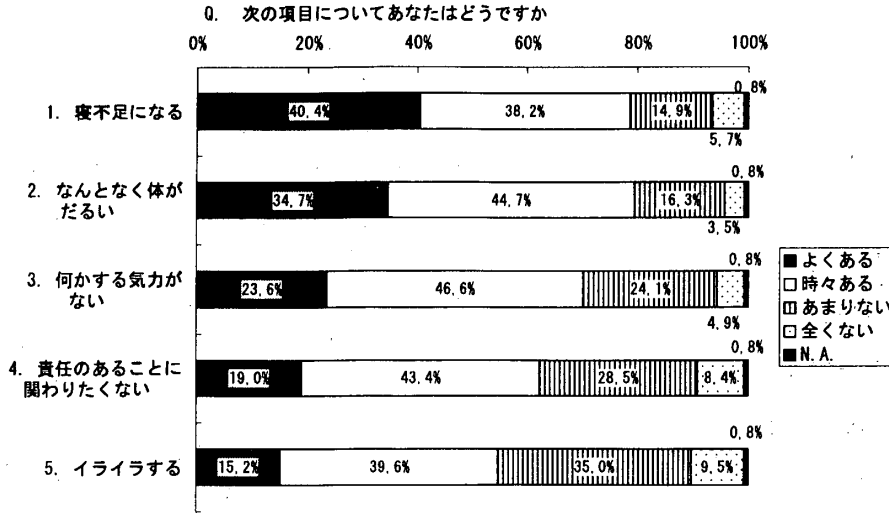


図17-1 心身の状態 (全体 n=369)

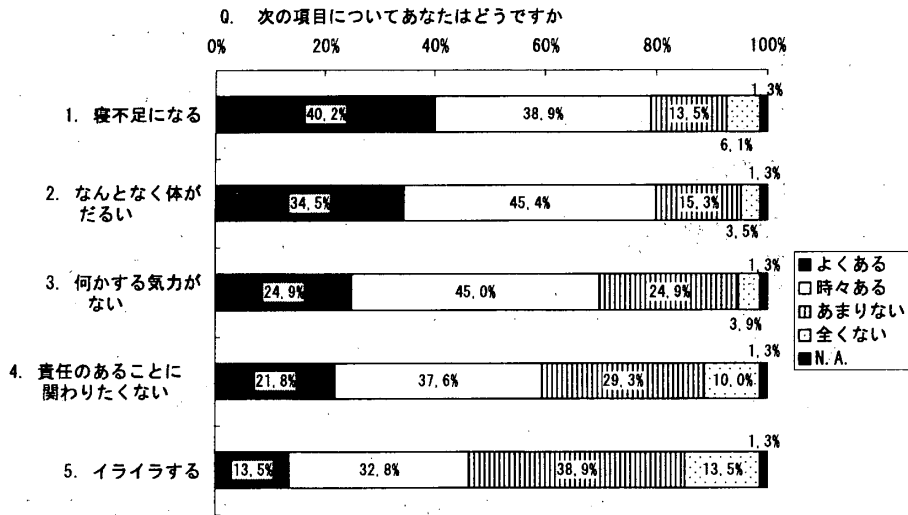


図17-2 心身の状態 (国立大 (理系) n=229)

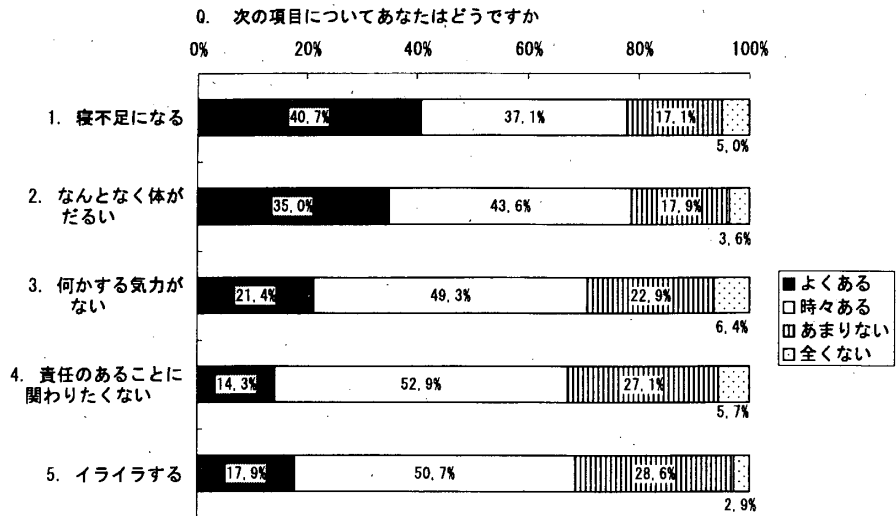


図17-3 心身の状態 (公立短大 n=140)

(3) 文化

1) 余暇の過ごし方

余暇をどのように過ごしているかを、回答数3の複数回答により尋ねた結果は、図18に

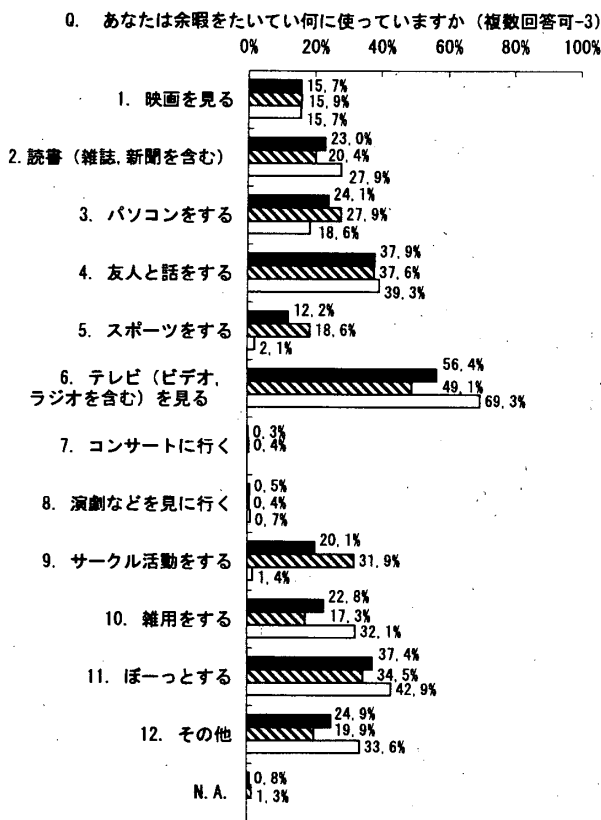


図18 余暇の過ごし方

まとめている。最も多かった回答は、全体、国立大 (理系)、公立短大ともに「テレビ (ビデオ, ラジオを含む) を見る」であった。とくに、公立短大では69.3%と高い値を示した。次に多かったのは、「友人と話をする」と「ぼーっとする」であった。映画やコンサート、演劇を見に行くと答えた者は、2校とも少なかった。内閣府の「文化に関する世論調査」によれば、映画や演劇を鑑賞する人が減り、文化全般への関心が低下する傾向にあるという (日本経済新聞 2004/1/25)。文化庁では、余暇時間の過ごし方が多様化した結果だと考察しているが、今回の大学生の調査結果では、費用がネックになってい

るのではないかと考える。今回の結果で高い率の回答を示したのは、費用が必要ない項目であった。大学生は大学間の区別なく、お金のかからない方法で余暇を過ごしていることが明らかになった。また、「ぼーっとする」ことが余暇の過ごし方だとの回答が多かったが、前述したしつけと心身の状態が関連しているのではないかと考える。つまり、意識下で他人に迷惑にならないようにと気を使いながら生活を続けることが、何かする気力がない、責任あることに関わりたくない、イライラするといった心身のひずみを生じさせ、余暇時間ぐらいは心身ともに弛緩したいという欲求から、「ぼーっと」と過ごすという項目に回答が集まったと考えられる。「友人と話をする」と「大学生活における対人面での満足感」との相関などとともに、これらの点をクロス集計によって明らかにしたい。

2) 雑誌と新聞の購読

週刊誌や漫画などの雑誌の購読状況を質問した結果は、図19に示す。この結果は、2つの大学で差が見られ、国立大 (理系) は「定期的に読んでいる」(39.7%) と「読まない」(37.6%) がほぼ同じ割合であった。それに対し、公立短大は「たまに買って読んでいる」と答えた者が45.7%と半数近かった。自由記述されたその雑誌名を概観したところ、定期、不定期に関わらず、国立大 (理系) は漫画雑誌 (週刊、月刊とも) が多く、公立短大では月刊のファッション雑誌がそのほとんどを占めた。

新聞紙面の中でよく読む欄を尋ねた結果は、図20の通りである。全体、国立大（理系）、公立短大ともに「読まない」がもっとも多く、次は、「スポーツ」欄であった。社会面はいずれも10%を超え、コラム・囲み記事は公立短大で12.9%と、社会面に並んで関心を引く欄であった。「その他」では、そのほとんどが「テレビ欄」と記述されていた。

「テレビ欄」を「読む」と言えるのかという疑問もあるが、低くない回答率に注目したい。前述の余暇の過ごし方では、2つの大学ともにテレビを見るという回答が多かった。余暇を過ごすためのテレビ視聴をさらに快適にするためのツールとして、新聞のテレビ欄を活用しているのではないかと考える。若年層の大学生

にとっての新聞の役割は変化し、社会や経済を始めとするあらゆる分野の新しい情報を得るために読むものではなく、テレビのリモコンのように道具として利用するためのものになりつつあるのではないかとという印象を受ける。

3) スポーツと観戦

よくするスポーツを尋ねた結果は、図21の通りである。国立大（理系）では「サッカー」（17.9%）、「しない」（15.7%）の順であったが、公立短大では「しない」が25%を超え、2位の「バトミントン」より10%以上値が高かった。

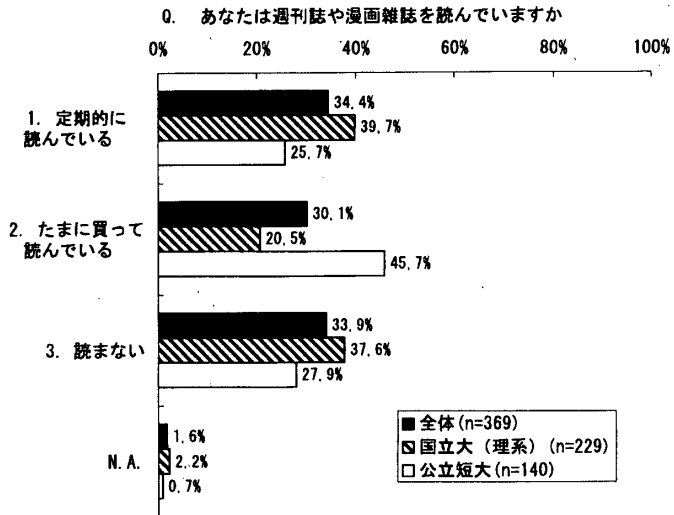


図19 雑誌の購読

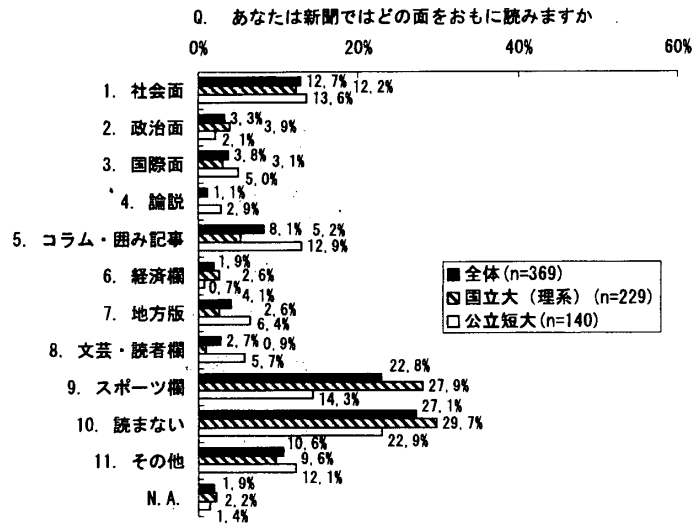


図20 新聞の購読欄

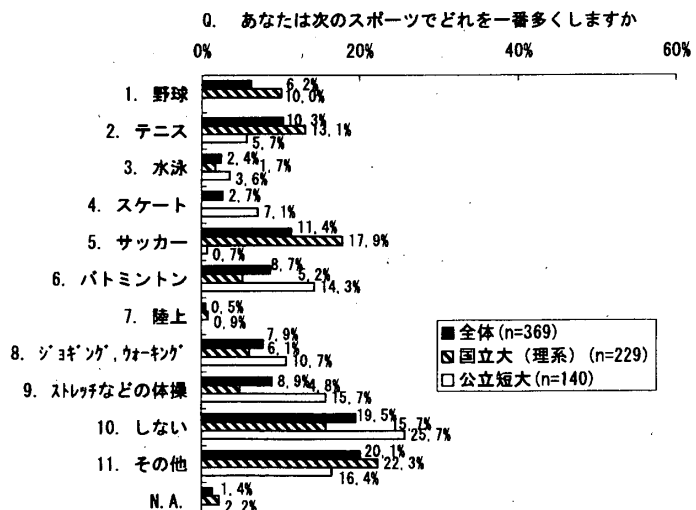


図21 スポーツ

観戦するスポーツについては、図22に結果をまとめた。国立大(理系)は「野球」(31.4%)が最も高く、次は「サッカー」(26.6%)であった。公立短大では「バレー」(31.4%)、「野球」(20.0%)の順となった。テレビ中継がされている中で、スピード感のあるスポーツが多く見られていた。

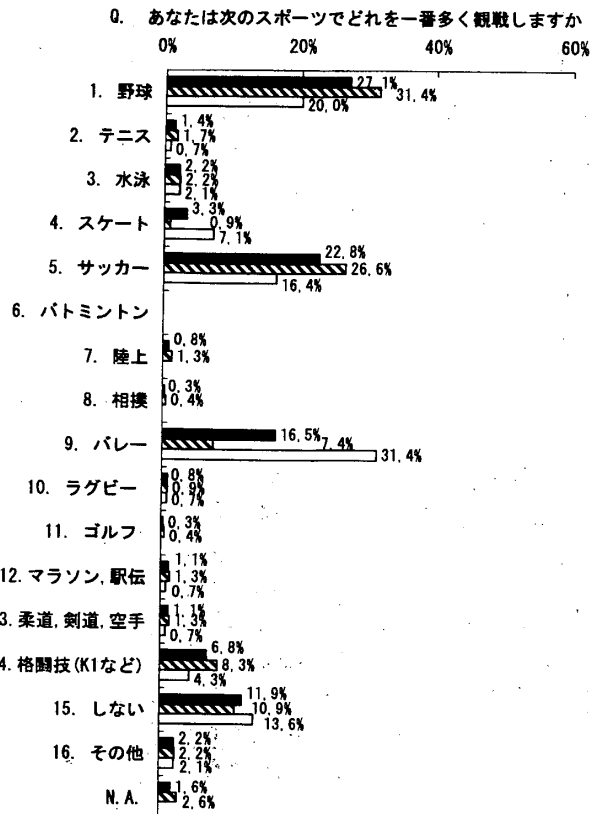


図22 スポーツ観戦

4) 嗜好品の利用状況

酒、タバコ、コーヒーの利用状況を質問した結果は、図23-1から図23-3に示す。「コー

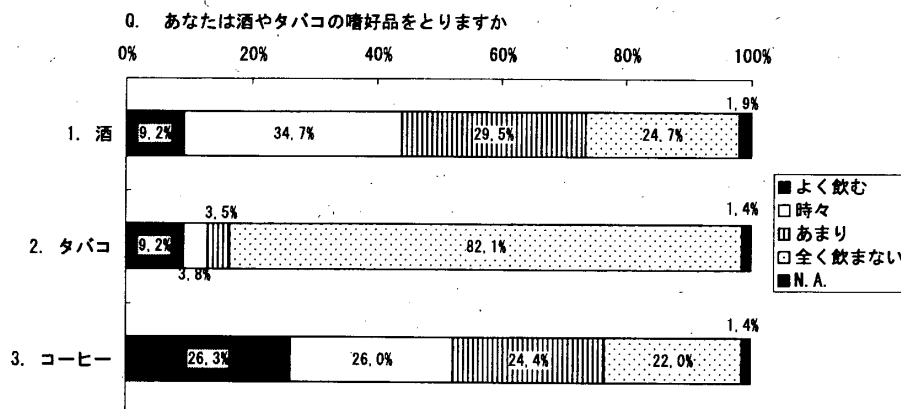


図23-1 嗜好品の利用状況 (全体 n=369)

ヒー」については、国立大(理系)、公立短大ともに同様の結果を得た。「酒」と「タバコ」では、差が現れた。酒については「よく飲む」の割合が、国立大(理系)では12.2%であったのに対し、公立短大では4.2%と少なかった。「時々飲む」者は、いずれも3割ほどであっ

た。「タバコ」についてはさらに違いが顕著で、国立大（理系）では「よく飲む」「時々飲む」を併せて20.5%であったが、公立短大では97.1%が「全く飲まない」と答えていた。昭和36年の生活調査では、20歳の対象者で酒を飲むと答えたのは男性で60%を越えていたが、女性で10%ほどであった。飲酒については、対象者の多くが未成年であることを勘案しても、40年前より男性は減少し、女性は増加していることがわかった。また、タバコについては、最近、喫煙の低年齢化の問題が報道された（日本経済新聞 2004/1/23）。小学校2年生の女儿がきれいな女優さんを見て、「タバコを吸うのはおしゃれた」と思い喫煙を開始したこと書かれている。今回の調査では、男女とも習慣的な喫煙者は多く見られなかった。

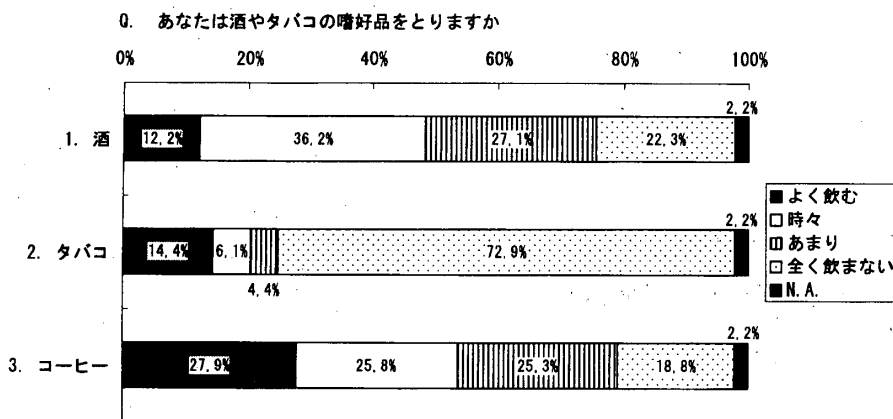


図23-2 嗜好品の利用状況（国立大（理系） n=229）

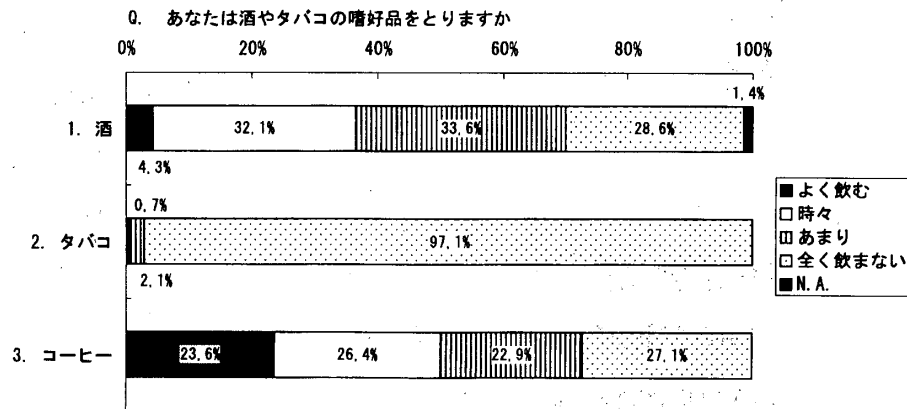


図23-3 嗜好品の利用状況（公立短大 n=140）

(4) 消費

1) 月平均の支出額

食費、通信費、書籍購入費、娯楽費、被服費について平均の支出額を質問した結果は、図24-1から図24-5の通りである。昼食やコンパなどの外食、菓子代を含む月平均の食費については、2校間で大きく異なっていた。国立大（理系）では1.6万円から3万円と回答した者が半数近くを占めたが、公立短大では半数を占めたのが0.5万円までであった。この結果は基本属性で示した居住方法の相違が影響しており、親元を離れて一人住まいの学生

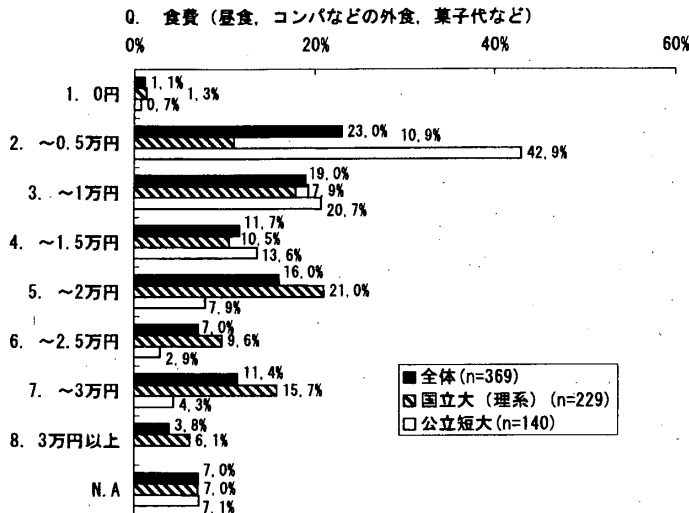


図24-1 月平均の支出額 (1)

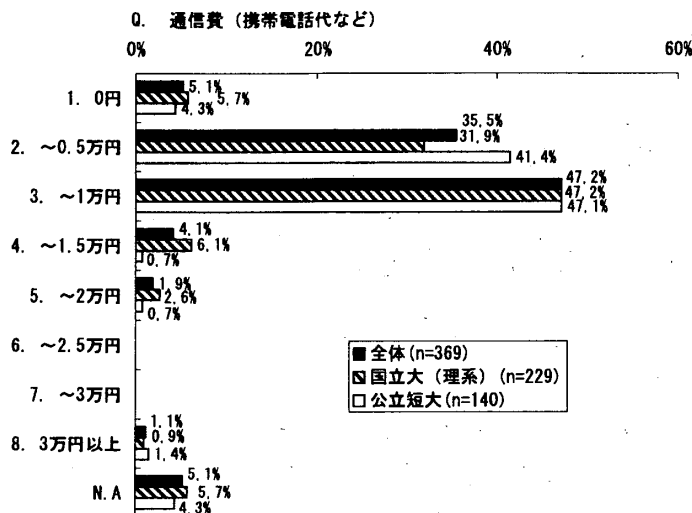


図24-2 月平均の支出額 (2)

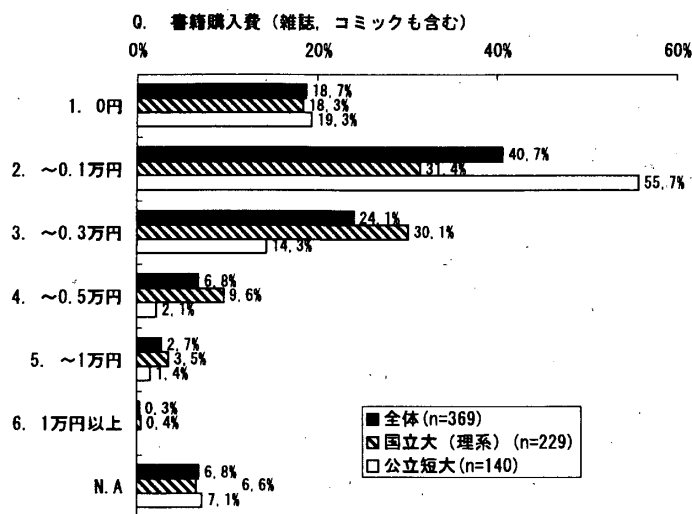


図24-3 月平均の支出額 (3)

は1日の食費を支出しなければならないことが原因であると考えられる。携帯電話代を含む通信費では、全体、国立大(理系)、公立短大ではほぼ同じ結果を得た。0.6万円から1万円の割合が50%に近く、0.1~0.5万円が国立大(理系)で31.9%、公立短大で41.4%であった。今回の調査では、通信費として支払う金額は予想より低いものであった。雑誌、コミックを含む書籍購入費は、2校とも0.5万円以上支払う者は少なく、いずれも7割近くが1ヶ月の書籍費が0.3万円以下であった。通信費と書籍費については、先に紹介した大学生協の生活実態調査でも結果がまとめられている。1997年の調査結果との比較であるが、書籍費は全国の大学生でも0.3万円以下が8割を占め、今回の結果とほぼ同様の結果であった。通信費(大学生協では電話代としている)を、0.6万円から1万円支払っていた者は全国平均で、15.6%程度、44.4%が0.5万円以下、0円が15.5%と、今回の調査より少額であった。調査時期に6年の隔りがあるが、その間に大学生の通信費は漸増していったのではないかと推察

される。交際費やパチンコ代を含む娯楽費は、いずれの対象者も1万円以下が8割近くを占めた。洋服代については、1万円以下と回答した者が2校の対象者とも6割以上いたが、

2万円以上支出している者もそれぞれ10%ほどいた。

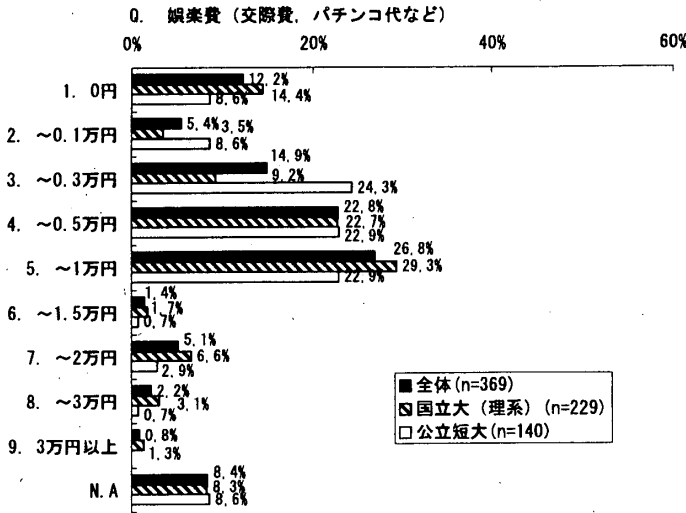


図24-4 月平均の支出額 (4)

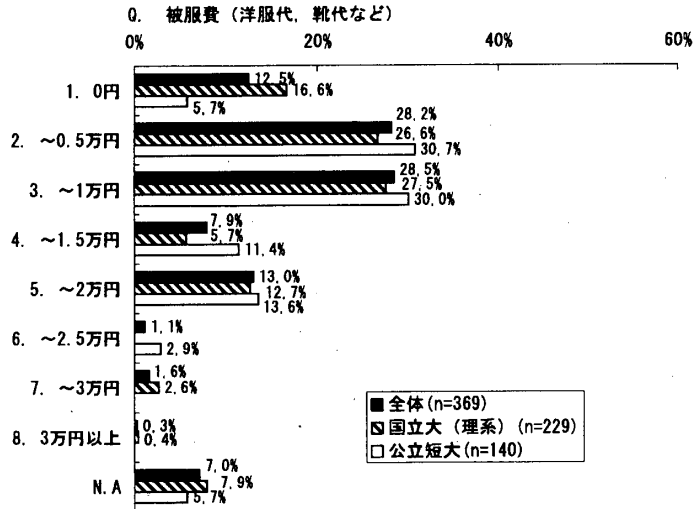


図24-5 月平均の支出額 (5)

2) 所有物

自分の小遣いやアルバイト代で購入したものを複数回答により答えた結果は、図25に示す。全体、国立大(理系)、公立短大のいずれも、40%ほどが自分で購入したものが無いと答えており、選択肢に挙げた高額商品は全く所有していないか、親から支出してもらったものと考えられる。公立短大

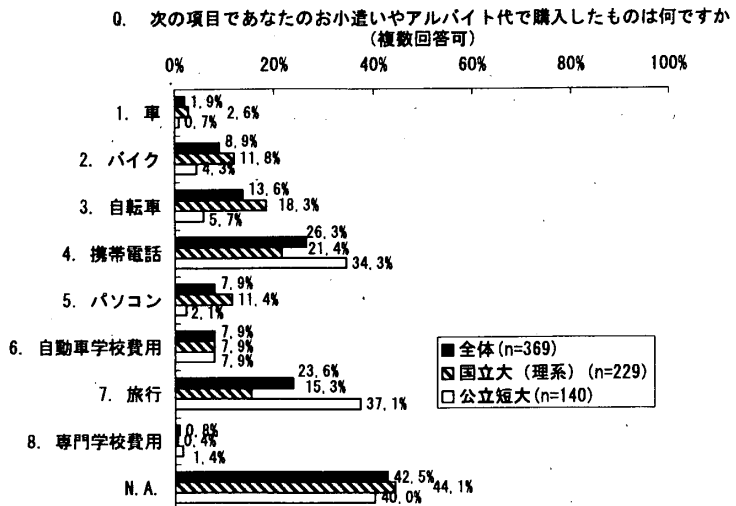


図25 自分で購入した所有物

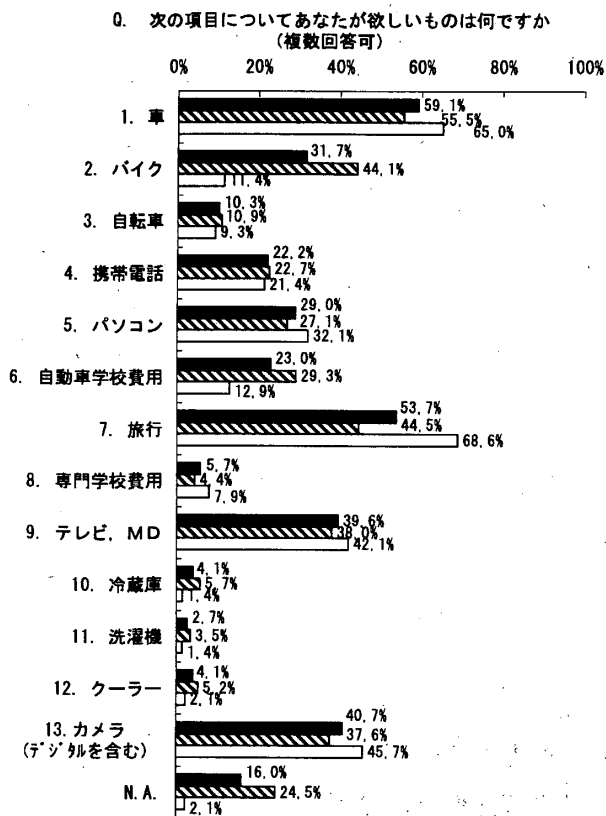


図26 欲しいもの

は「旅行」(37.1%)、「携帯電話」(34.3%)と答えた者が多かったが、国立大(理系)ではいずれの選択肢も20%以下であった。

現在欲しいものを尋ねた結果は、図26にまとめた。この設問も複数回答による。国立大(理系)は「車」(55.5%)、「旅行」(44.5%)、「バイク」(44.1%)、「テレビ、MD」(38.0%)、「カメラ(デジタルを含む)」(37.6%)の順に、公立短大は「旅行」(68.6%)、「車」(65.0%)、「カメラ(デジタルを含む)」(45.7%)、「テレビ、MD」(42.1%)の順に回答が多かった。国立大(理系)の「バイク」以外は、欲しいものとして2校の間で同様のものが挙げられた。昭和36年の調査で

も欲しいものの調査を行っているが、今回の調査とは異なり、学生の耐久消費財への欲求は生活の近代化の指標になるとして、設問が耐久消費財への要求となっている。その結果では、耐久消費財に対する欲求に男女の差は無く、東京では「電気冷蔵庫」「自動車」、仙台などの地方では「ステレオ」「自動車」の回答が多かった。今回の調査では、「物」も欲しいものとして挙げられたが、「旅行」に回答が多かった点が特徴的であった。昭和36年当時は生活を豊かに彩る(=近代化)ファクターは耐久消費財であったと思われるが、今回の調査では、旅行による経験や思い出作りが対象者の生活を豊かにするものとして選択されたと考える。集計中に現れた特徴を1点記す。この設問は複数回答であったが、対象者によって1つか2つしか選択しない者と、7つあるいは選択肢のほとんどを選ぶ者に分かれた。この点は他の回答ともクロスさせながら、次回、背景要因を探りたいと考えている。

3) 購入時の判断基準

物を購入する際、どのような点を判断の基準とするかを複数回答により尋ねた結果は、図27の通りである。全体、国立大(理系)、公立短大のいずれも「価格」を第1に挙げ、その割合は75%を超えた。2番目は「色、デザイン」で2校の対象者とも半数以上を占め、いずれも次は、「品質」、「感性」の順であった。この質問は1999年のプレ調査でも行っているが、選択された項目とその選択率の高さの順序は同じであった。その時の考察では、「若年層は自由に使えるお金が少ないため、流行や懸賞品に影響を受けることが少なく、価格や品質、機能性といった他の物と客観的に比較できる項目によって慎重に吟味するといった堅実な消費姿勢が特徴である」と記述したが、今回の調査でもその姿勢は堅持され

ていることが明らかになった。

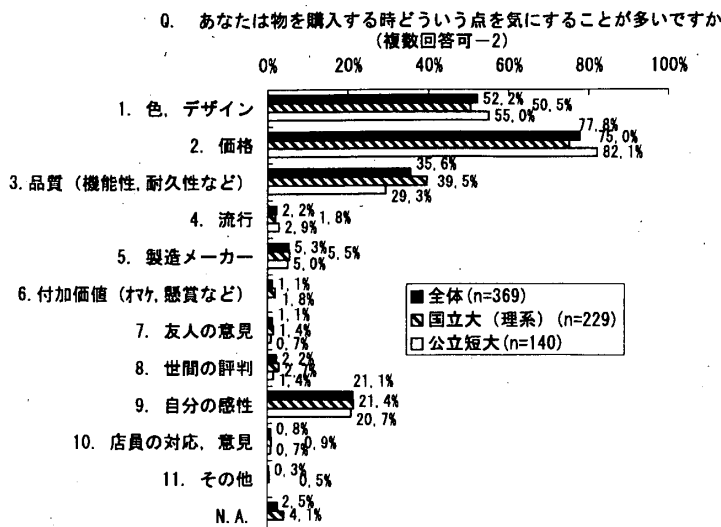


図27 購入時の判断基準

4) 臨時収入の使い方

収入が増えたらおもに何にまわしたいかという質問への回答は、図28の通りである。国立大 (理系) と公立短大の回答結果には相違が見られた。

国立大 (理系) では、「貯金」(54.5%) 「洋服」(50.9%) の順であったのに対し、公立短大では「洋服」(77.9%) 「貯金」(65.0%) と、女子学生が多く所属する公立短大の回答では8割近くが「洋服」を求めている。「貯金」

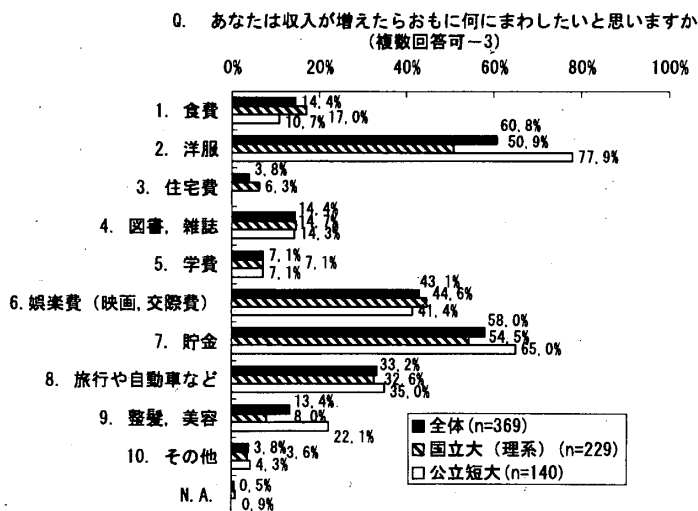


図28 臨時収入の使い方

に関して、いずれの大学も高い値を示した。この設問は、昭和36年に行われた生活調査を参考に作成した。臨時収入の金額を具体的に示していないため、まず金額を想定し、補充したい項目を回答することになる。その過程を含めて40年前と今回との比較を試みると、昭和36年の調査では、男子学生は「趣味を豊かにする」(43.7%) 「家を建てる」(27.2%)、女子学生は「貯蓄する」(43.2%) 「趣味を豊かにする」(32.3%) の順であった。さらに、男女とも3位は「土地を買う」で、「衣服費を増やす」と答えたのは男女とも3%に満たなかった。臨時収入に対するイメージがまず異なっており、回答結果から40年前の大学生は臨時収入として高額を想定し、さらに、希望する使い方も大胆で、土地購入や家の建設という回答がされていた。40年前の学生と比べることによって、先述した最近の学生の堅実で小胆な消費姿勢と経済生活が裏付けられる結果となった。

5) 貯蓄の実態

貯蓄の実態を質問した結果を、図29と図30に示す。貯蓄は、国立大（理系）の35.8%、公立短大の55.7%が「している」と答え、2つの大学間で違いが見られた。その目的を尋ねたところ、国立大（理系）は「目的は無いが将来のため」（21.7%）と答えている者もいるが、「自動車・バイクを買うため」（18.1%）「自動車学校や専門学校に行くため」（15.7%）「旅行に行くため」（12.0%）と目的を持つ者が多い。それに対し、公立短大は「旅行に行くため」（25.6%）という目的以外、具体的な項目は挙げず「目的は無いが将来のため」（44.8%）に貯蓄していると答えた。基本属性に照らして、男子学生より女子学生の方が貯蓄に対する意識は高いが、その目的は曖昧なものであることが明らかになった。

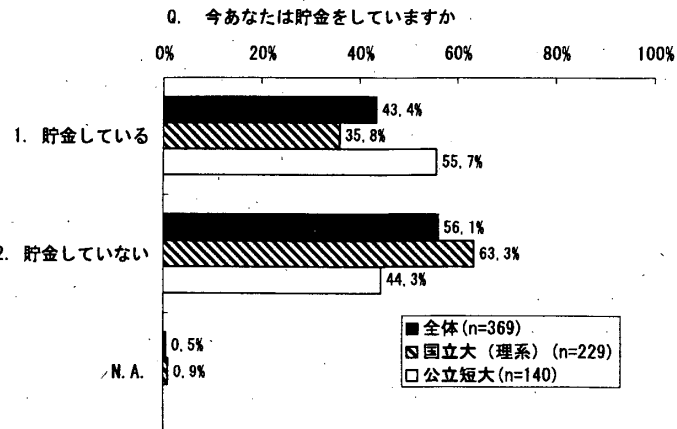


図29 貯蓄

と目的を持つ者が多い。それに対し、公立短大は「旅行に行くため」（25.6%）という目的以外、具体的な項目は挙げず「目的は無いが将来のため」（44.8%）に貯蓄していると答えた。基本属性に照らして、男子学生より女子学生の方が貯蓄に対する意識は高いが、その目的は曖昧なものであることが明らかになった。

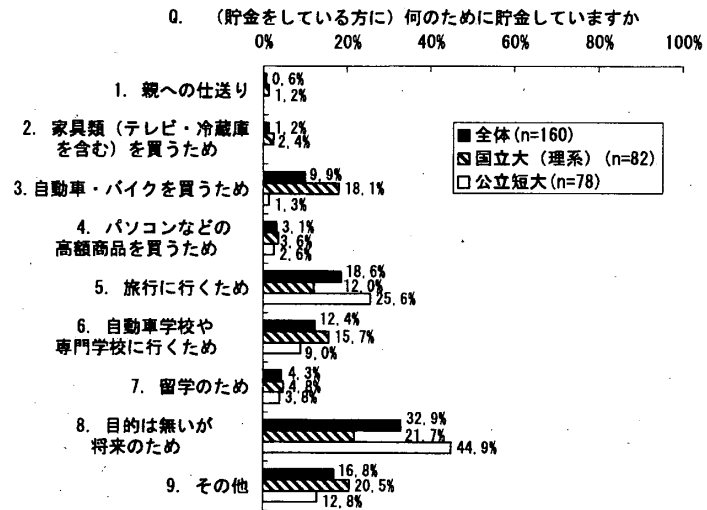


図30 貯蓄の目的

6) 金銭感覚

金銭に関する価値観を検討するために5つの項目を設定して質問した結果は、図31-1か

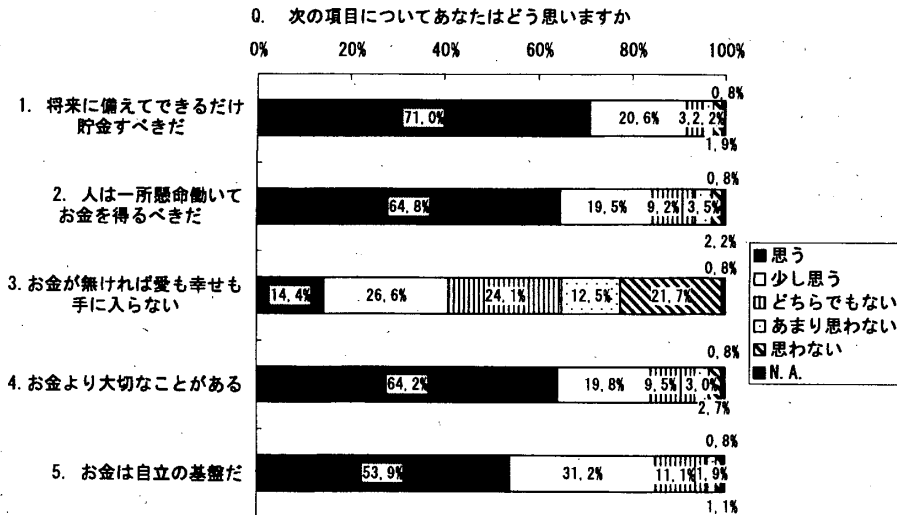


図31-1 金銭感覚 (全体 n=369)

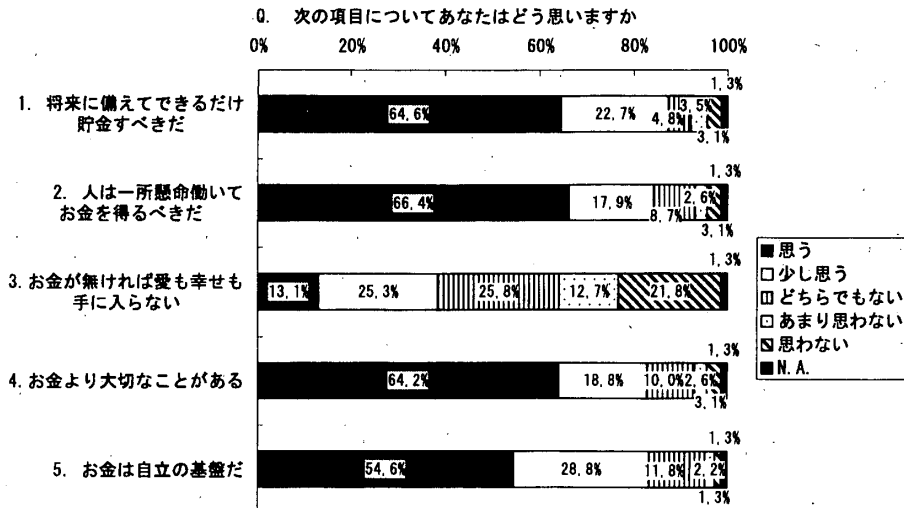


図31-2 金銭感覚 (国立大 (理系) n=229)

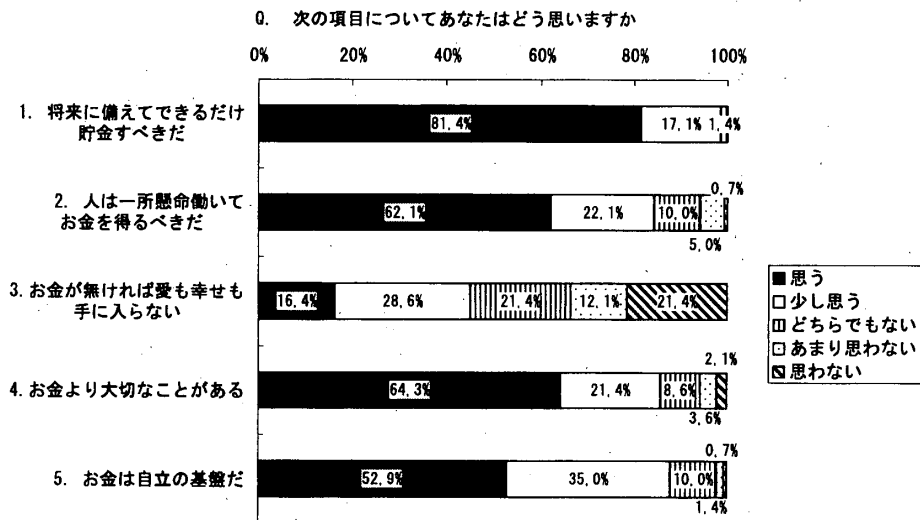


図31-3 金銭感覚 (公立短大 n=140)

ら図31-3に示す通りである。「将来に備えてできるだけ貯金すべきだ」という項目以外の4項目は、全体、国立大 (理系)、公立短大で同様の傾向を見せた。先の設問にも関連するが、この設問でも貯金については国立大 (理系) と公立短大間で差が現れ、「将来に備えてできるだけ貯金すべきだ」と考えるのは、公立短大の方が16ポイントも高かった。質問数は異なるが、1999年のプレ調査でも同様のことを尋ねている。5項目とも今回の方が「そう思う」の回答が多くなっている。とくに「将来に備えてできるだけ貯金すべきだ」と「お金は自立の基盤だ」においては顕著で、「お金は自立の基盤だ」では「そう思う」が3倍に増加した。若年層の価値観は、社会や経済状況の影響を大きく受けると考えられるが、いわゆる「長引く不況」が各自に経済生活の自立を自覚させている印象を受ける。また、年齢の割に強い自己犠牲感が感じられるが、拝金主義には偏らない堅実な金銭感覚を持っていることがこの設問でもわかる。

(5) 意識

1) 価値

現在最も大切にしていることを尋ね、対象者の価値観を浮上させることを試みた設問の

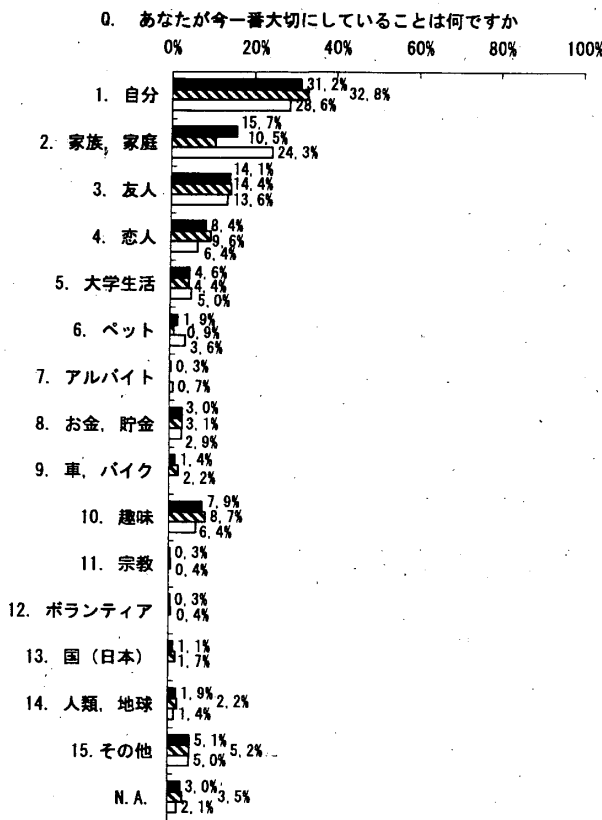


図32 価値

結果は、図32の通りである。全体、国立大 (理系)、公立短大ともに最も多かったのは「自分」で、3割ほどの対象者が回答した。次に回答の多かった項目は、国立大 (理系) では「友人」(14.4%)「家族、家庭」(10.5%)「恋人」(9.6%)、公立短大では「家族、家庭」(24.3%)「友人」(13.6%)「恋人」「趣味」(ともに6.4%)の順であった。1999年のプレ調査結果でも、「自分」「家族、家庭」「友人」の順で値が高く、その値もほぼ同様の傾向であった。4番目の項目は前回と異なっており「大学生活」が挙げられていたが、パーセンテージの違いは2%ほどであった。設問の方法は異なっているが、ベネッセも高校生

を対象に同様の調査⁷⁾を行っている。その結果においても、「自分」「友だち」「家族」を大切に思う割合が高く、とくに女子生徒は自分と同一視し、それらに愛着を抱く傾向があると考察している。今回の調査では男女差を比較していないのでその点は不明だが、ベネッセの調査結果や「国」「人類、地球」を回答した者がほとんどいないことから、「自分」を中心に、「家族、家庭」「友人」「恋人」といった、「半径50m以内の人間関係」を重視する対象者の「柔らかな相互依存関係」が浮き上がる結果となった。

2) 将来の見通し

対象者自身の10年後を質問した結果は、図33の通りである。全体、国立大 (理系)、公立短大のいずれも「明るいような気がする」(全体: 24.0%)「なんとなく明るいような気がする」(全体:30.6%)

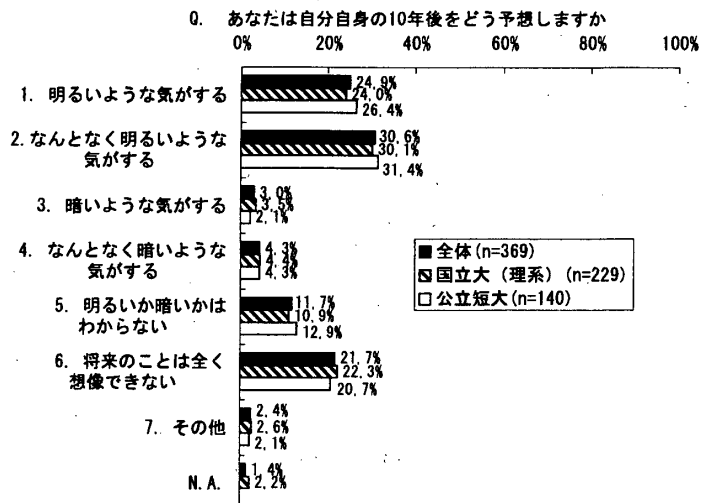


図33 将来の見通し

を併せて50%を超えた。質問の表現を手直したが、1999年のプレ調査でもほぼ同じ質問をしている。その結果では、「明るいような気がする」と答えた者が10.7%、「なんとなく明るいような気がする」と回答した者は44.3%であった。「明るい」と答えた対象者が50%を超えた点はどちらの結果も同じであったが、今回の方が、より積極的に将来を「明るい」と捉えていることがわかった。「暗い」「将来のことは想像できない」などの残りの項目については、今回の調査もプレ調査も同様の結果であった。

3) 人生の目標

人生の目標とすることを尋ねた結果を、図34に示す。2つの対照校間で最も回答の多い

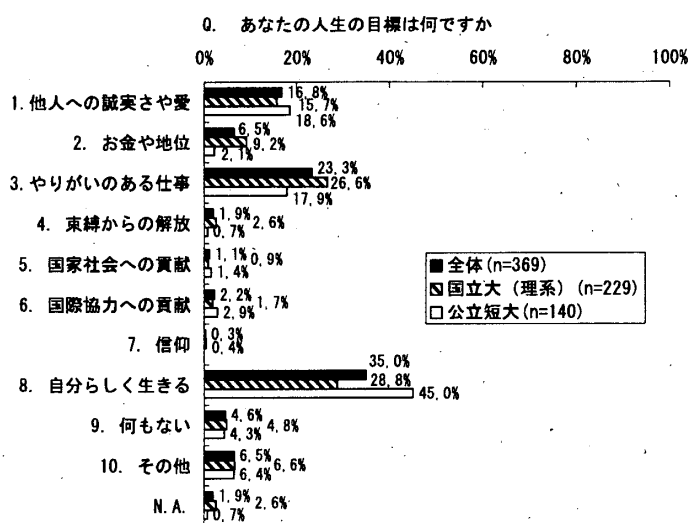


図34 人生の目標

項目は同じで、「自分らしく生きる」であったが、その割合は異なり、国立大(理系)では28.8%、公立短大では45.0%であった。次に多い項目も割合は異なっていたが、同じく「やりがいのある仕事」で、国立大(理系)は26.6%、公立短大は17.9%であった。3番目に回答の多かった項目は「他人への誠実さや愛」で、国立大(理系)は15.7%、公立短大は

18.6%とほぼ同じであった。若年層の大学生が改まって人生の目標を聞かれることは少なく、普段の生活の中で始終吟味している項目ではないと予想するが、これらの回答からは「自己本位」の優位性が感じ取れる。前述の価値の項目でも特徴付けたが、人生の目標においても自分を中心とする身近な人間関係の重視が際立ち、屹立する関係や社会を視野に入れた項目には回答が少ない。

4) 自己評価

7つの項目について自己評価を各自回答した結果は、図35-1から図35-3にまとめた。全体では、「正直である」「責任感がある」「協調性がある」「理解力がある」の4項目が「そう思う」「まあ思う」を併せた割合が50%を超えたのに対し、「創造的である」「積極的である」「個性的である」の3項目は、「そう思う」「まあ思う」を併せた割合が50%以下であった。2校を比較すると、「創造的である」「個性的である」の2項目で「そう思う」「まあ思う」割合が、国立大(理系)の方で5%ほど高かった他は、5項目において公立短大の方が自己評価が高かった。1999年のプレ調査でも質問しているが、その結果と今回の全体の結果を比較すると、「創造的である」「積極的である」「個性的である」の3項目で「そう思う」「まあ思う」を併せた割合は今回の結果の方が高かった。残りの項目も「そう思う」「まあ思う」を併せた割合では差が見られなかったが、「そう思う」だけでは今回の

調査の方が多かった。ここまでの調査結果を通して、一番大切にしているものが「自分」、
人生の目標も「自分らしく」と、自分を大切に思っているにも関わらず、個性的であるこ

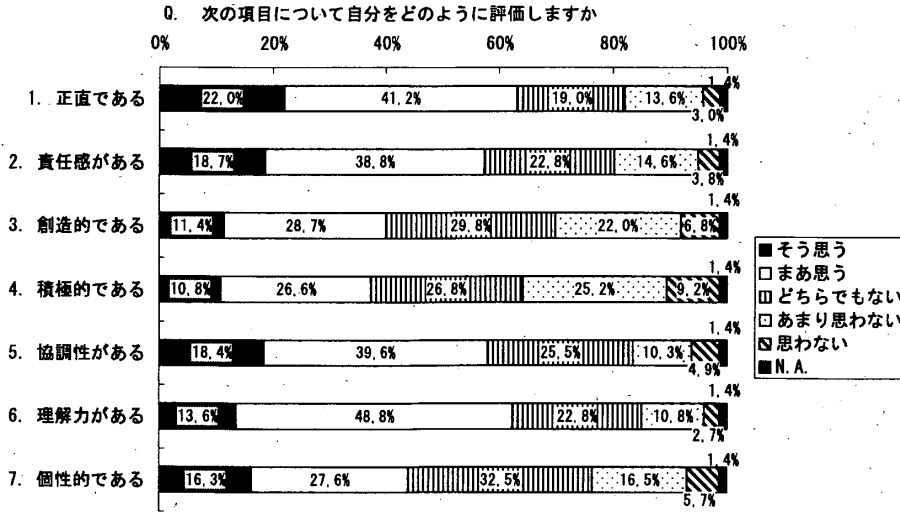


図35-1 自己評価 (全体 n=369)

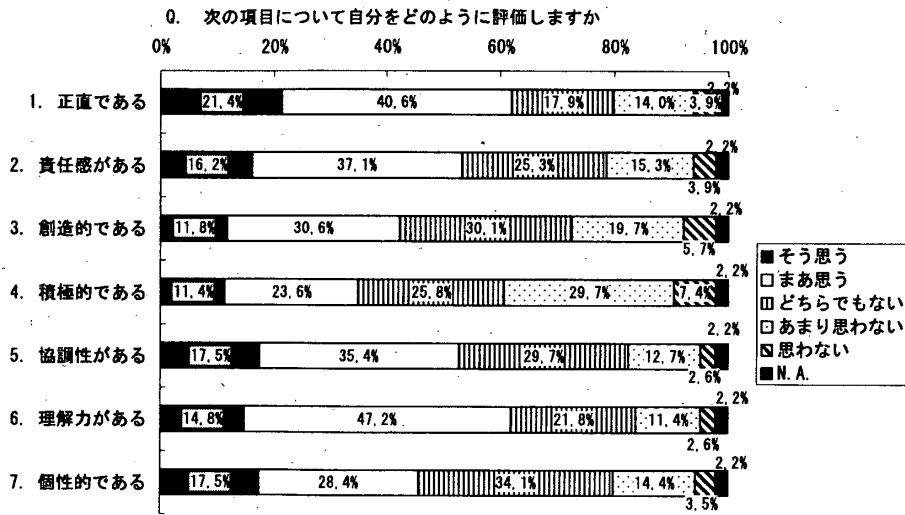


図35-2 自己評価 (国立大 (理系) n=229)

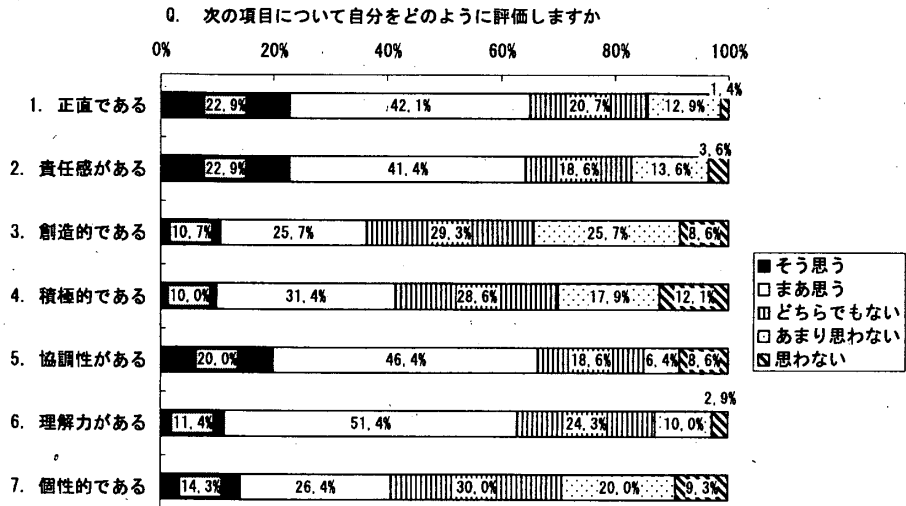


図35-3 自己評価 (公立短大 n=140)

とへの自己評価は低い。また、「親から言われたこと」と「自己評価」との相関関係の詳細は、クロス集計によって調べて次の報告でまとめる予定だが、親子関係において前述した、しつけを通した「メッセージ」を、今回調査対象とした若年層の大学生は深く内面化していることが伺える。1999年の調査対象者ほど過適応ではないようだが、「他人に迷惑にならないようにと親から言われた」ことは「協調性がある」、「自分の責任は果たす」と言われたことは「責任感がある」というように、親のメッセージと自己評価が強く繋がっているのではないかと感じられる。

5) 自己像とその根拠

自分を大人だと思うかと尋ねた結果を、図36、その判断の根拠は、図37に示す。「おとな」と答えたのは、全体、国立大(理系)、公立短大ともに10%ほどであった。「こども」と答えたのは、公立短大が多く50.7%、公立短大に比べれば少ないが、国立大(理系)も41.9%であった。「どちらでもない」と答えた者も多く、国立大(理系)で40.6%、公立短大で37.9%が回答した。回答内容に関わらず、その根拠は全体、国立大(理系)、公立短大ともに

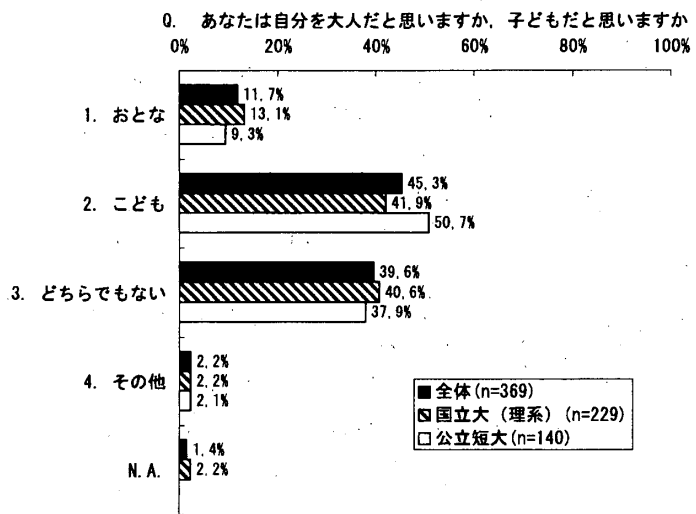


図36 自己像

「自分の中の基準から判断して」が50%を超えた。1999年のプレ調査結果では、「おとな」が5%、「こども」が48%、「どちらでもない」が42%、その根拠は「自分の中の基準から判断して」が55%と、今回とほぼ変わらない結果であった。驚田清一は公立大学の大学院生に同じ質問をし、そのほとんどが子どもと答えたことに驚いた

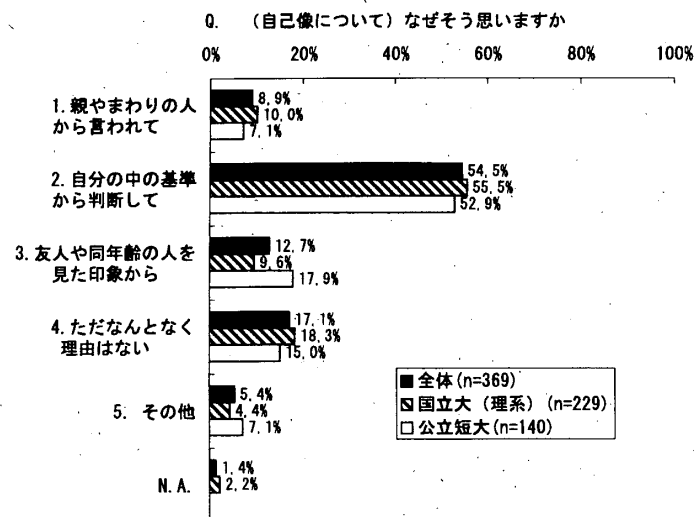


図37 自己像の根拠

と記している(“装いのたくらみ”日本経済新聞 1999/10/16)。「こども」と「おとな」の境界線は年齢によって引かれるのではなく、就職が1つの目安なのではないかと考えられる。就職によって、職場や渉外先で家族や友人とは違う異年齢の他者との交流が生じる。その交流の中で「自分の中の基準」が作り変えられ、生活年齢に一致する成熟した精神年

齢に達していくのではないかと推察できる。

6) 労働観と就職観

自分が働かなければならない理由を質問した結果は、図38の通りである。全体、国立大

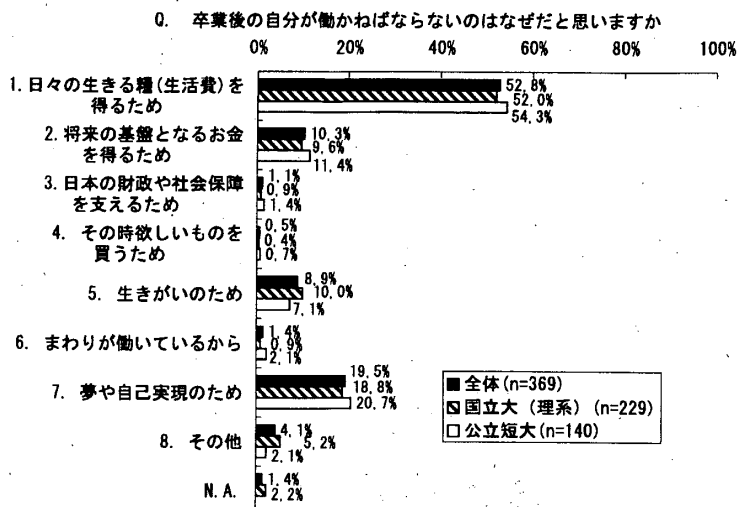


図38 労働観

(理系)、公立短大のいずれも、最も回答が多かったのは「日々の生きる糧(生活費)を得るため」で半数を超えた。次は、「夢や自己実現のため」でいずれも2割を占めた。「将来の基盤となるお金を得るため」「生きがいのため」が10%ほどの回答率で続いた。全ての項目で、国立大(理系)と公立短大の回答に差は見

られなかった。1999年に行ったプレ調査でも最も多かったのは、「日々の生きる糧(生活費)を得るため」で50.4%、2番目と3番目に回答が多かった項目も今回の調査と同じであった。相違していた項目は「生きがいのため」で、プレ調査では3.8%であった。日本の経済が好調であった頃、労働の目的は「消費」と言われたこともあったが、今回の調査とプレ調査のいずれも、「その時欲しいものを買うため」と答えた者はほとんどいなかった。モルヒネ経済と言われながら、そのモルヒネも効かなくなった日本の経済状況を背景に、若年層の大学生の労働観は大学間の差なく堅実そのものであった。「13歳のハローワーク」を著わし、若年層に労働の意味を問い掛ける村上龍は、自分自身の働く意味は「お金と充実感」と答えている(日本経済新聞 2004/1/29)。「労働の目的=お金」だけでは今後の経済は行き詰まると村上龍は言い、仕事のやりがいや充実感を若者に問うている。今回の若年層の回答に「生きがいのため」が少ないことは、教育現場でも家庭でも労働の意味を考える機会が少ないため、不況を背景とした社会状況が若年層の考え方にダイレクトに反映された結果であると考えられる。

就職について4項目を質問し、就職に対する考え方をまとめた結果は、図39-1から図39-3に示す。「就きたい職業を決めているか」と「就職のために何かしているか」についての回答結果は、国立大(理系)と公立短大では差が見られず、前項では「はい」が50%を超え、後項では「はい」が30%ほどであった。あとの2項目は2校の間で差があり、「就職に対する不安があるか」という質問では、公立短大の96.4%が「はい」と答え、国立大(理系)では9割に満たなかった。さらに、「卒業後すぐに就職するのは早い」と思う者は公立短大は38.6%であったのに対し、国立大(理系)では18.8%と少なかった。前述の通り、労働観については2校の間に顕著な差は見られなかったが、就職に対する考えにはい

くらか違いが現れた。公立短大は短期であるため、国立大（理系）に比べて就職をより身近に感じ、気持ちの面では働く準備が出来ていることが推察される。

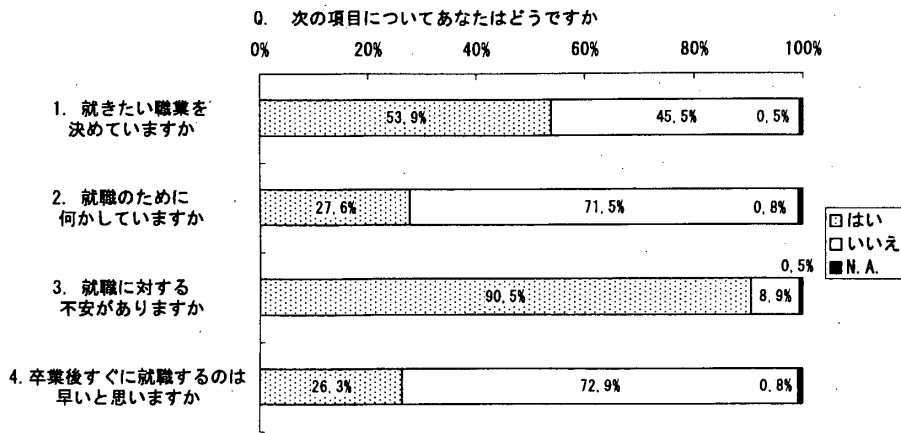


図39-1 就職に対する意識（全体 n=369）

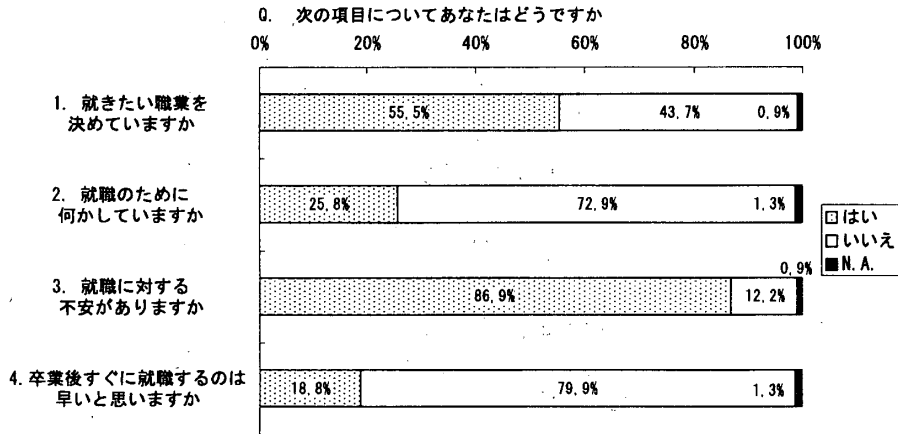


図39-2 就職に対する意識（国立大（理系） n=229）

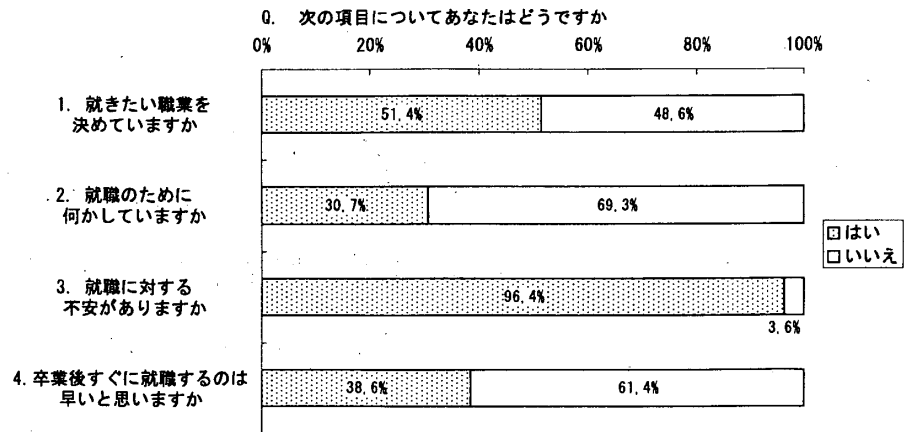


図39-3 就職に対する意識（公立短大 n=140）

7) 規範意識

法律に反する事柄から友人やコミュニティ間のモラルに関することまで、若年層の規範意識を問う6項目に対する判断をまとめたものは、図40-1から図40-3である。「覚せい剤

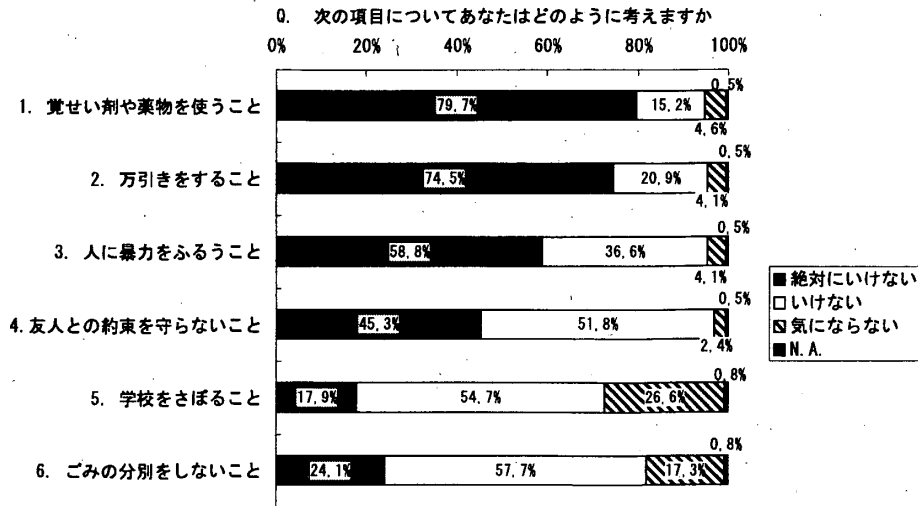


図40-1 規範意識 (全体 n=369)

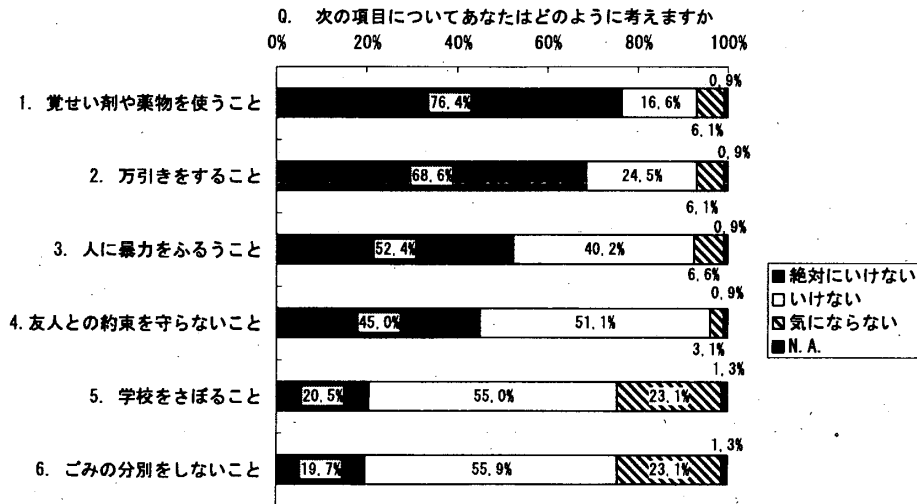


図40-2 規範意識 (国立大 (理系) n=229)

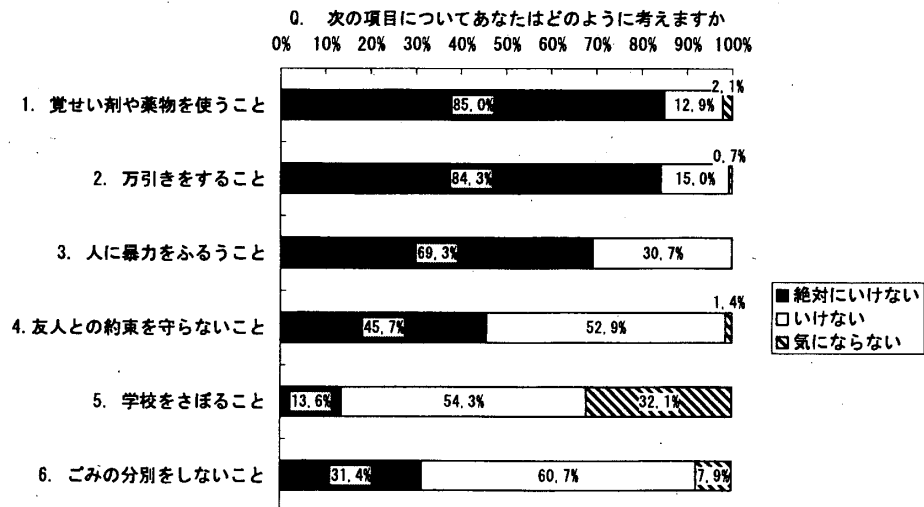


図40-3 規範意識 (公立短大 n=140)

や薬物を使うこと」「万引きをすること」「人に暴力をふるうこと」の法律に関わる3つの項目については、2校の対象者とも「絶対にいけない」「いけない」の回答を併せて95%を超えた。とくに、「絶対にいけない」と回答した割合は、公立短大の方が高かった。「友人との約束を守らないこと」については、2校の間に差は見られなかった。「絶対にいけない」と「いけない」を併せて95%を超えたが、「絶対にいけない」は50%以下であった。「学校をさぼること」については、「気にならない」と答えた者が多かったのは公立短大で、「ごみの分別をしないこと」では、国立大（理系）の方が「気にならない」と答えた者が多かった。今回調査の若年層においては、規範意識の希薄化は見られず、法律に反することについてはむしろ規範意識が高かった。ただ、互いに顔を見知った友人やコミュニティ間では自分を律する意識が緩む傾向が見られた。

8) 生活志向

生活の志向が個人に向いているか、社会に向いているかを尋ねた結果は、図41の通りである。

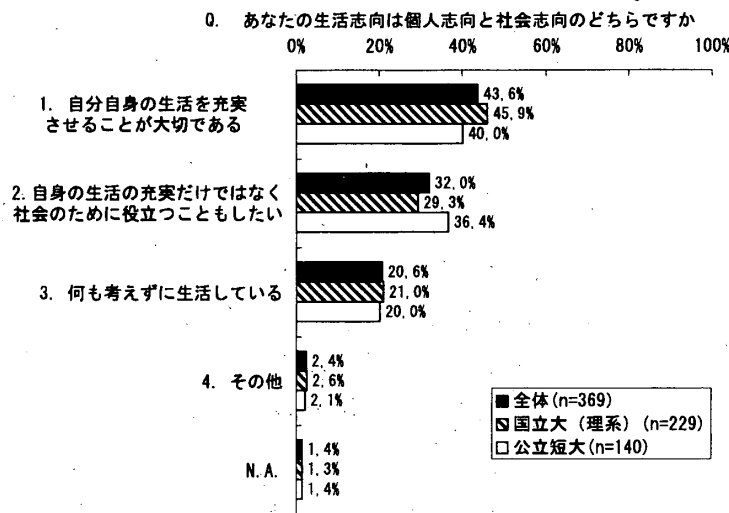


図41 生活志向

2校の対象者を比べると、いずれも「個人生活志向」と回答した割合が高く、国立大（理系）は45.9%、公立短大では40.0%であった。公立短大は「社会生活志向」（36.4%）の割合も高く、2つの生活志向が拮抗していた。設問の参考にした20年前の先行調査結果⁸⁾

では、「個人生活志向」が54.3%、「社会生活志向」が33.2%で、この2つの分類に関しては今回の調査結果との間に大きな差はなかった。現れた顕著な差は、今回の調査で「何も考えずに生活している」者が20%を超えたことである。1999年に行ったプレ調査では設問が全く異なっていたが、家族や友人との静かな交流をベースとする対象者の生活行動を質問によって浮上させた。今回の調査によって、個人を大切に生活するのか、社会に目に向けた生活スタイルなのかを意識することなく生活する者が増えつつあると推察される。

9) 日本に対する認識

日本が最も誇れるものを尋ねた結果は、図42に示す。最も回答が多かったのは、2校とも「歴史や文化遺産」であったがその値は異なり、国立大（理系）は22.7%、公立短大では31.4%であった。次に高かったのは、国立大（理系）では「科学や技術」（20.1%）、公立短大では「文化や芸術」（18.6%）で、公立短大では「生活水準」（17.9%）が続いた。表現は変えたが、この設問も前記の20年前の先行調査を参考にしている。その結果では、「歴史や文化遺産」「科学や技術」「教育水準」「文化や芸術」「生活水準」の順に回答が多

かった。今回の対象者は若年層の大学生であるが、日本の教育水準を評価する者がほとんどいなかった。

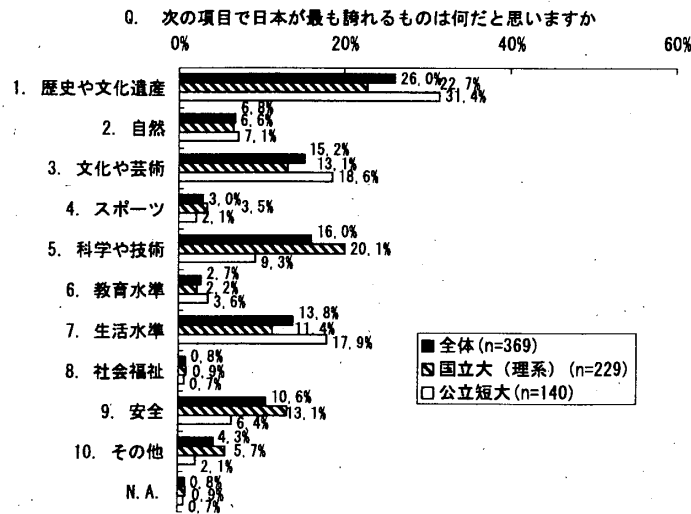


図42 日本に対する認識

10) 生きがい

生きがいを質問した結果は、図43の通りである。最も多かったのは「恋人や友人、仲間」といときで、国立大(理系)が32.3%、公立短大は41.4%と数値は公立短大の方が高かった。2番目は「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」で、国立大(理系)が25.3%、公立短大は17.9%であった。ここまで、いくつかの質問で言及したが、今回の対象者は、自分を含む身近な人間関係を重視する傾向が見られ、この項目でもその点を確認できた。

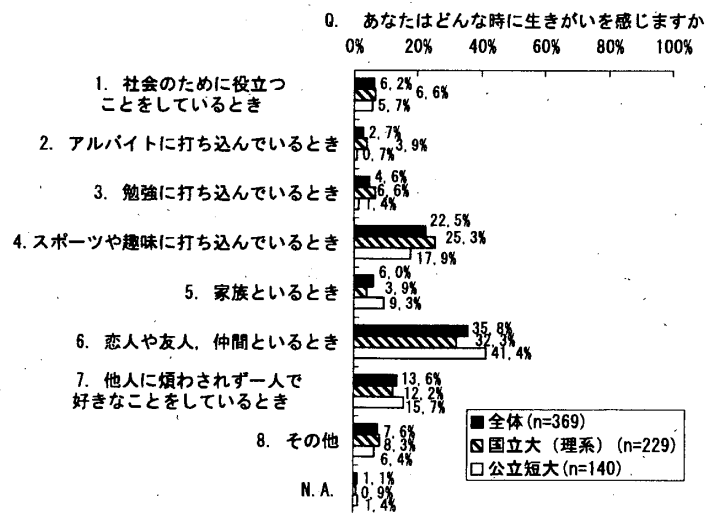


図43 生きがい

11) 地域への愛着

大学がある鹿児島市への愛着について尋ねた結果は、図44である。「好きである」が最も回答が多く、とくに公立短大では60.0%であった。詳細は表1の基本属性で示したが、公立短大の52.1%が鹿児島市出身であったのに対し、国立大(理系)では24.5%であった。その基本属性の差に関わらず、半数以上が鹿児島市に愛着を感じていた。昭和36年の調査では、居住地についての質問がある。その結果では、東京、秋田、宮崎の大学生のいずれも「郊外がいい」と答えており、8割を超えていた。今回の調査では「もっと田舎にあこがれる」と答えた者は少なく、「ほどよい」地方都市=鹿児島市への満足度は高かった。とく

に公立短大では出身地である鹿児島市への愛着が高く、家族や友人が多く住む「柔らかな人間関係」を保てることへの安心や満足感が背景にあると考える。

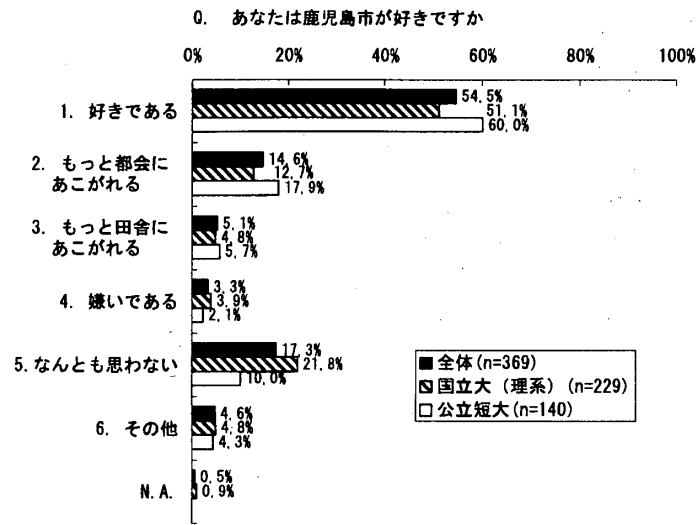


図44 地域への愛着

12) 余暇観

先に余暇時間の実際の使い方を尋ねたが、この項目ではゆとりの時間をどう過ごしたいかの意識について質問

した。その結果は、図45

の通りである。全体、国

立大 (理系)、公立短大い

ずれも「趣味や遊びに使

う」と答えた者が最も多

く6割を占めた。先に

示した実際の余暇の過

ごし方と意識との間に

相違は少なく、余暇＝

んびり遊ぶこと、といっ

た意識と実態が今回の

対象者間では共通していることがわかった。

0. あなたは時間にゆとりができれば時間をどのように使いたいか

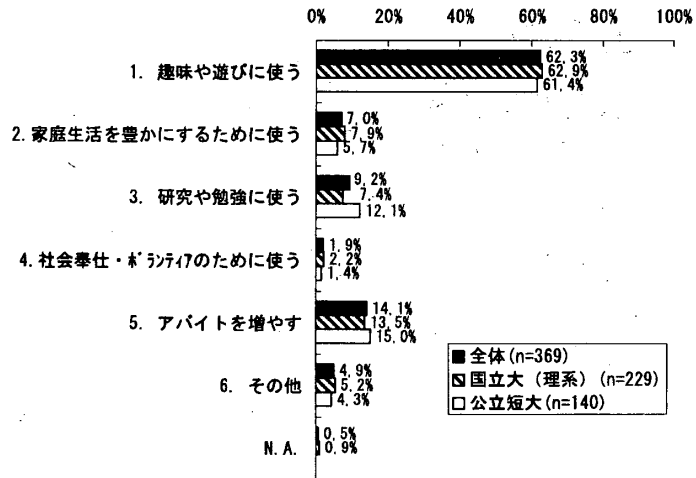


図45 ゆとり時間の使い方

13) 社会観

社会を良くするためには何が必要かを尋ねた結果は、図46に示す。調査時期が衆議院選

挙と少し重なったため、報道等で政治問題を目にする機会が多かったことが影響したと考

えられるが、最も回答が多かったのは「政治を変える」であった。2校の対象者間の差は

なかったが、値は低く、国立大 (理系) が24.0%、公立短大が27.9%と3割に満たなかつ

た。残りの回答は他の4項目に分かれ、「家族中心の考え方を育てる」「自分を大切にする

考え方を育てる」「日本経済を活性化する」「時間やお金・物に縛られないスローな生活に

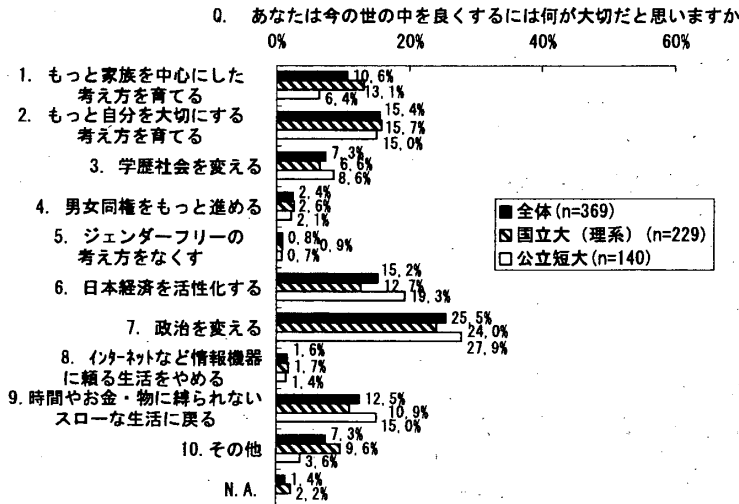


図46 社会に対する意識

戻る」で全体の回答率が10%を超えた。昭和36年の調査では、選択項目が異なっているが、同じ質問がされている。その結果で最も多かったのは、対象者居住地の差なく「都市と農村の文化差をちぢめる」で5割を超えた。その当時は、社会を良くするために必要なものが明確であったと考えられる。

今回の調査では、回答がバラツいたことが特徴的で、社会の悪い点に対する認識が低いか、あるいはその要因を絞りきれない対象者の意識が浮かび上がった。

14) 結婚観

結婚をすべきかどうかについて尋ねた結果は、図47に示す通りで、結婚の目的を質問した結果は、図48の通りである。

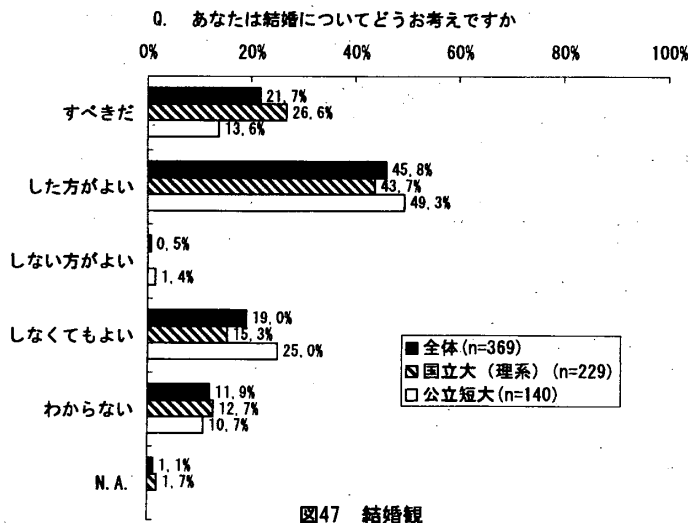


図47 結婚観

半数近くが結婚は「した方がよい」と答え、国立大（理系）では43.7%、公立短大では49.3%の値を示した。「結婚すべき」と強い意志を回答した者は、国立大（理系）で26.6%、公立短大では13.6%、反対に「結婚しなくてもよい」と答えたのは国立大（理系）で15.3%、公立短大では25.0%と数値が項目間で逆転した。

基本属性でも示したように、公立短大の98%が女性であった。若年層の大学生の中で、「生む性」と言われる女性の結婚に対する意識は緩やかで、「しなくてもよい」と考えている者が4分の1を占めることがわかった。

結婚の目的でも、国立大（理系）では「精神的に安定するため」（36.2%）「男女の協力により自分の家庭を築くため」（35.4%）の順に回答が多く、公立短大では「男女の協力により自分の家庭を築くため」（47.1%）「精神的に安定するため」（32.9%）と国立大（理系）と逆の結果であった。この質問を作成する際に参考にした1974年の先行研究⁹⁾では、「互いの協力によって自分たちの家庭が築かれるから（家庭の構築）」「精神的に安定するから（精神の安定）」「自分たちの子孫が残るから（子孫の存続）」が極めて高い数字を示し

たとしている。今回の調査と比較すると、子孫の存続に対する考えが異なっている。今回の調査は1974年の調査より、結婚を現実的、経済的な生活面より精神的で情緒的な事と強調して捉えている。

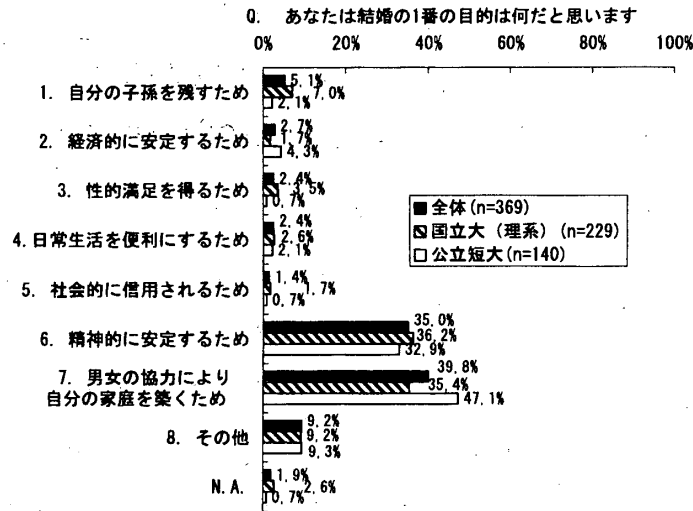


図48 結婚の目的

15) 配偶者に対する考え方

配偶者に対して求める条件を質問した結果は、図49の通りである。また、結婚後配偶者に望む働き方を尋ねた結果は、

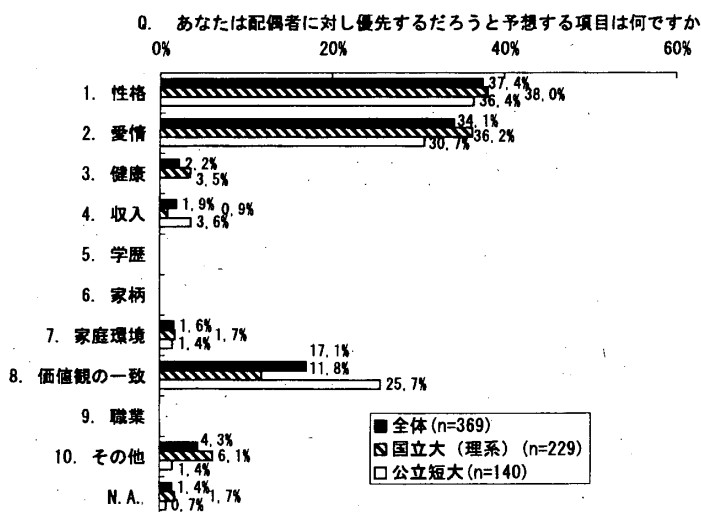


図49 配偶者に優先する資質

図50に示す。配偶者に求める条件は、国立大(理系)、公立短大ともに「性格」が最も多く、次は「愛情」で、いずれも30%を超えた。その次に多かったのは「価値観の一致」であったが、示す数字は2校間で異なり、国立大(理系)は11.8%、公立短大は25.7%であった。この結果は前項の結婚の目的とも関連していると考えられる。

つまり、「収入」や「学歴」、「家庭環境」などのように客観的に評価出来る事柄を重視するのではなく、曖昧で機械的には測れない項目を配偶者選びの条件とし、精神面を重視した結婚生活を目指していることである。平均的な結婚年齢は上がっているため、実際の結婚はまだ先であると捉え、具体的な人やイメージを思い浮かべるに至っていないことが背景要因だと考えられる。

配偶者に望む働き方は、2校の対象者間で顕著な差が見られ、国立大(理系)では「相手の思うとおりでよい」が41%を占めたのに対し、公立短大では「状況に応じて話し合う」が66.4%であった。また、「妻は家にいるべき」と回答したのは、2つの対象者とも5%以

下であった。日本では家庭内の性別分業が根強いとされているが、今回の調査では、意識は少なくとも「男は外で働き、女は家を守る」ことを否定している。とくに女子学生が多くを占める公立短大ではその傾向が強かった。ただ、最近では年金制度への不信感から、「家事と両

立するなら働く」と答える者が8割を占めるという（日本経済新聞調査 対象：主婦490人 2003/12/18）。その結果を見ると、家事育児は夫婦で分担とは掛け声だけで、実際は「女は外で働き、家も守る」方向を社会状況は迫っている。ところが、女子学生の多い公立短大では「状況に応じて話し合」いたいのに、男子学生の多い国立大（理系）の半数近くが「相手の思うとおりでよい」と回答しており、この項目については、若年層の意識も男女ではズレが生じていることが明らかになった。

4. 要約

今回、鹿児島にある2つの大学に通う対象者の比較を通して、大学生の消費を含めた生活状況と身体、文化に関する意識と実態を調査した。その結果は次に示す通りである。

1) 生活：生活時間については、テレビを視聴する時間が長かった他は、睡眠時間を始めとして少なめであった。生活や大学生活に対する満足感は、心の面ではやや少なかったが、満足する者が概ね多かった。学業の目的では、実社会ですぐに役立つ技術や知識を得たいとする者が多かったが、学業全般に対して不満がやや多かった。アルバイトの経験は、アルバイトをした者にとって有意義な経験として肯定的に捉えられていた。生活の不安としては、多くの者が将来の職業を挙げた。親子関係では、しつけによって強く伝わっているメッセージが見られた。食生活は、居住方法との高い相関が予想された。

2) 身体：健康については、関心の高さに比べ、それに伴う顕著な行動は見られなかった。身体感覚については、瘦身願望と軽い筋肉崇拜が男女別に受け取れた。心身の状態は、1999年の調査に比べて不定愁訴の割合が増えていた。

3) 文化：余暇の過ごし方は、テレビの視聴やぼーっと何もせず費用のかからない方法を答える者が多かった。雑誌や漫画はよく読まれていたが、新聞はあまり読まれていなかった。スポーツについては、積極的・日常的にされているスポーツは少なく、観戦は、テレビ中継されスピード感のあるスポーツが好まれていた。嗜好品については、タバコの習慣的な喫煙者は少なかった。

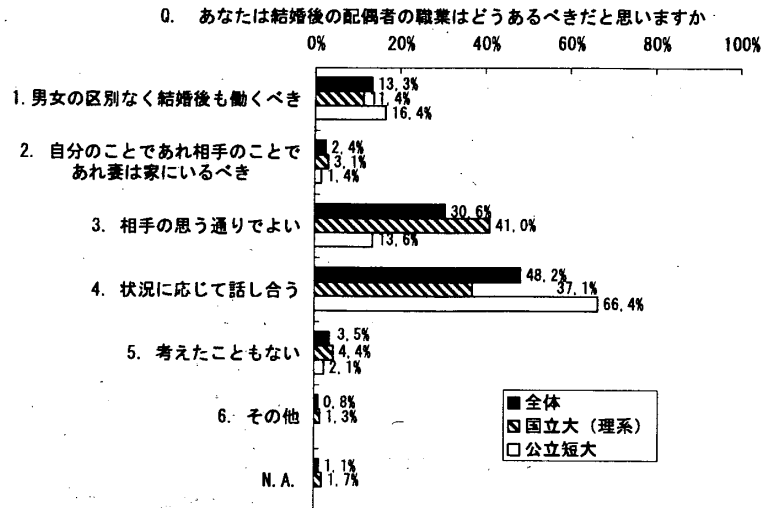


図50 配偶者に望む働き方

4) 消費：生活費の支出については、携帯電話代が予想よりも少なく、娯楽費、被服費とともに1万円以下が占めた。所有物は、自分のお金で購入したものは少なかった。欲しいものは、「物」と同時に、「旅行」が多かった点が特徴的であった。購入時の判断基準は、「価格」を1番に挙げていた。貯蓄の実態については、目的を持って貯蓄している者は3割程度で、金銭感覚については、他の質問結果とも併せて堅実さが伺われた。

5) 意識：将来の見通しについては、「明るい」と予想している者が多かった。価値や生きがいについては、自分を中心にした親しい人間関係を重視し、人生の目標では、「自分らしく生きる」という回答が目立った。自己評価については、概ね評価が高かったが、創造性、個性、積極性については他の項目より低かった。自己像については、「こども」と回答した割合が半数近かった。労働観と就職観については、社会状況を背景に意識が高く、堅実なものであった。規範意識は、法律に触れる項目についてとくに高かった。日本に対する認識は、「歴史や文化遺産」が誇れる国だと評価し、半数以上が鹿児島に愛着を感じていた。社会観は、社会に対する共通認識が低いことを背景とした結果となった。結婚観は、約半数が「結婚すべき」と答え、配偶者に対する条件には、精神性といった曖昧なものを求めている。さらに、配偶者の職業については、意識ではいわゆる伝統的な家庭内の性別分業は否定されていた。

引用文献

- 1) 西迫貴美代・坂上ちえ子：「鹿児島における若年層の生活文化調査（第1報）プレ調査結果」、鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報、第32号、1-32（2001）
- 2) 社団法人国民生活研究所：「若い世代の生活と意識－消費を中心として－」（1961）
- 3) 全国大学生生活協同組合連合会：「第32回学生の消費生活に関する実態調査結果」（1996）
- 4) NHK放送文化研究所編：『現代日本人の意識構造（第五版）』、日本放送出版協会、159-163（2000）
- 5) 千石保：『日本の高校生－国際比較で見る』、日本放送出版協会、82-96（1998）
- 6) 池上彰：集英社文庫『これが週刊子どもニュースだ』、(株)集英社、253-255（2000）
- 7) ベネッセコーポレーション：「モノグラム・高校生VOL.53」、
http://www.crn.or.jp/LIBRARY/KOU/VOL530/VOL53_01.HTM
- 8) 総理府青少年対策本部：『世界の青年との比較からみた 日本の青年－世界青年意識調査（第3回）報告書－』、大蔵省印刷局、62-63（1984）
- 9) 松原治郎：「日本青年の意識構造 「不安」と「不満」のメカニズム」、(株)弘文堂、154-157（1974）